

**開催日時** 令和3年11月0日(土) 開場13時30分 開演14時  
東京国際フォーラム(D7ホール)

**催事名称** 「ぴーすふるシンポジウム」

**定員** 会場50名/オンライン聴講500名

**プログラム** **第1部**  
特別講演:「中村哲医師の事業を継いで～アフガニスタンの今～」  
ベシャワール会会長村上優氏  
招待講演:「ひめゆり、次世代へ～リニューアルと新しい取組～」  
ひめゆり平和祈念資料館館長普天間朝佳氏

**第2部**

パネルディスカッション

パネリスト:ベシャワール会会長	村上優氏
ひめゆり平和祈念資料館	普天間朝佳氏
ぴーすふるメッセンジャー	仲本和氏(令和2年度メンバー)
沖縄国際大学地域行政学科准教授	野添文彬氏
ぴーすふるアクション・ファシリテーター	狩俣日姫氏

司会進行:佐渡山美智子氏(フリーアナウンサー)



**概要** 第二次世界大戦の終結から76年が経過し、21世紀に入って20年余を経ても争いごとの絶えない国際情勢。だがそれを他所事とせず、むしろ関心をもって意見を発信していくことで平和な世界の実現を目指す。というところを目的として、2つの講演とパネルディスカッションのシンポジウムを開催した。

昨年度同様に、新型コロナウイルス感染予防対策のため、会場定員50名(最大キャパシティの20%)にオンライン聴講500名を定員とした。事前申し込みは会場が36名、オンラインは200件弱、実際の来場者は会場が17名、オンラインは最大時で約100名であった。

第1部特別講演は、第1回(平成14年度)沖縄平和賞の受賞団体であるベシャワール会の村上優会長にご登壇頂いた。

「中村哲医師の事業を引き継いで～アフガニスタンの今～」との演題にも示される通り、受賞当時の代表であった中村哲医師は2019年12月にアフガニスタンで銃撃事件に遭遇し死去した。

そのあとを引き継いで、同会会長を務める村上氏は、1970年代に中村医師と出会ってから、パキスタン、アフガニスタンなど中村医師と活動をともにし、ベシャワール会設立から深く関わってきた。

絶えない紛争と度々訪れる干ばつにより、尊いはずの人命があまりにも簡単に失われていく地域で活動するベシャワール会の思いは村上氏の声を通して「平和とは抽象的なものではなく、実際そのもの」という言葉に凝縮される。

続いて招待講演では、前年に引き続きひめゆり平和祈念資料館館長の普天間朝佳氏をお招きした。

「ひめゆり、次世代へ～リニューアルと新しい取組～」と題した講演では、次世代へ受け継いでいくことを意識した情報発信の難しさ、悩みから展示までのプロセス、リニューアル後の状況や、戦後世代同士で平和への思いを育てていくことへの意見が展開された。

第2部パネルディスカッションでは、講演のお二人に加えて、沖縄国際大学地域行政学科の野添文彬准教授、前年度(令和2年度)メッセンジャーであり、いまは大学で平和教育に関する活動を続ける仲本和氏、そして本事業のワークショップファシリテーターとして事務局側から3年間支え続けてきた、狩俣日姫氏にも登壇願った。

「21歳でステージ上では最年少だが、戦争体験者が少なくなっている現在、平和について考える、行動することに年齢は関係ない」という仲本氏の言葉で開幕し、それぞれの立場から意見を交換した。

初登場の野添氏は「沖縄は戦前も戦中も戦後も多くの矛盾を抱えており、それがために平和を考えるうえで非常に学びの多い場所である」とし、ファシリテーターを務める狩俣氏は「若い世代の友達同士の会話に、ファッションや恋愛の話題と同じように、平和に関する話題が入るような(社会的な)雰囲気になってほしいと願う」と話した。

会場からの質問に応えた村上氏の「アフガニスタンの人々は(憲法9条の存在を知っており)日本をもっと尊敬している。わたしたち(ベシャワール会)は紛争状態のアフガニスタンで一人の人も殺していない、一発の銃弾も撃っていない。その(丸腰の)状態で活動し続けていることに対して、アフガニスタンの人々はものすごい尊敬と親和性を寄せてくる。それを自分たち(日本人)のプライドとして考えられるか。プライドとして受け止めて頂きたいと願います」という言葉は、非常に印象的なディスカッションとなった(後頁で全文掲載)。



## 開会

司会 佐渡山美智子(フリーアナウンサー)

### ○司会

あらためまして、皆さま本日はようこそいらっしゃいました。沖縄県が主催しております「御万人びーすふるアクションびーすふるシンポジウム」をこれから始めさせていただきます。この東京国際フォーラムから生配信を併せてお届けいたします。司会進行を担当いたします佐渡山美智子です。よろしくお付き合いくださいませ。

さて、本日のシンポジウムは、新型コロナウイルス感染予防の観点から、会場はソーシャルディスタンスに配慮したお席を準備させていただきました。限られた座席数ということで、皆さまにはご案内できなかった方々もいらっしゃいますが、その皆さまにはオンラインでご一緒いただきたいと思います。インターネットを使ったオンラインの中継を併せて行います。会場内のお客さま、感染予防へのご協力、いろいろとお願い事が多くありましたが、どうもありがとうございました。

それでは、開会に際しまして沖縄県知事玉城デニーより主催者あいさつを申し上げます。本日は玉城知事に代わりまして、沖縄県子ども生活福祉部統括官の座安治がごあいさつを申し上げます。

## 1. 主催者あいさつ・取り組み紹介

沖縄県知事 玉城 デニー

代読 沖縄子ども生活福祉部統括官 座安 治

### ○座安

本日は知事が出席できませんので、私の方であいさつを代読いたします。

「はいさい、ぐすーよー、ちゅーらがなびら。皆さま、こんにちは。びーすふるシンポジウムの開催にあたり、ごあいさつを申し上げます。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、会場での参加と併せて500名のオンライン聴講を可能とし、会場にお越しいただけい全国の皆さまに向けてライブ配信を行っております。

沖縄県では、先の大戦において、住民を巻き込んだ過酷な地上戦が繰り広げられ、多くの尊い命が失われ、かけがえのない文化遺産が破壊されました。このような体験を通して私たち沖縄県民は、命の尊さと平和の大切さを肌身に感じながら、世界の恒久平和の実現を強く求め続けております。

そのためには、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次世代に伝え、平和のメッセージを発信し続けることが重要であると考えており、県民個々の戦争体験を結集して設立した平和祈念資料館における沖縄戦の実相の記録展示や、沖縄戦終結50周年を記念して建設した「平和の礎」に、国籍を問わず沖縄戦などで亡くなられた全ての人々の氏名を刻銘する取り組みを行っております。

平成13年度には、沖縄平和賞を創設し、アジア・太平洋地域の平和の構築・維持に貢献する活動を行う団体を表彰し、県民の平和への思いを発信してまいりました。さらに令和元年には、県内で平和につながる身近な社会貢献活動に取り組む者を表彰する「ちゅらうちなー草の根平和貢献賞」を創設し、グローバルな視点に立った沖縄平和賞と、より身近な地域における社会貢献活動にスポットを当てた「ちゅらうちなー草の根平和貢献賞」が連関し、平和で豊かな社会の実現に寄与することを目指しております。

沖縄戦から76年が経ち、戦争を知らない世代が大半を占める中、悲惨な戦争体験を風化させないさらなる取り組みとして、「御万人びーすふるアクション」と題しまして、みんなで沖縄戦の実相を学び、平和の尊さを考える機会をつくり、それぞれが行動していくためのきっかけとなる取り組みを進めております。本日の「びーすふるシンポジウム」は、それぞれの立場から見る平和のかたち、戦後100年を迎えるために今できることを問い掛けて考えていくことを目的としております。

本シンポジウムでは、第1回の沖縄平和賞の受賞団体であるベシャワール会の会長の村上優さまに、そして、ひめゆり平和祈念資料館館長の普天間朝佳さまにご講演いただきます。また、ご講演の後には、沖縄国際大学の野添文彬さま、そして、びーすふるメッセンジャーの仲本和さま、狩俣日姫さまにご登壇いただきパネルディスカッションを行います。ご多忙の折お引き受けいただきました講師およびパネリストの皆さまに対し、心から感謝を申し上げます。

結びに、ご来場の皆さまのますますのご健勝をお祈りするとともに、平和を希求する沖縄の心が世界中に伝わり、恒久平和が実現することを祈念して、ごあいさついたします。

令和3年11月20日、沖縄県知事、玉城デニー。

### ○司会

沖縄県知事からのごあいさつを座安統括官より申し上げます。

それでは、これより「びーすふるシンポジウム」第1部講演会です。

なお、講演会の最中はマスメディアの方を除いて、写真撮影、動画の撮影はご遠慮をいただいております。また、オンライン中継の方も、アプリケーション録画機能はオフしておりますので、ご了承ください。

それでは、本日の特別講演です。

テーマは「中村哲医師の事業を継いで ～アフガニスタンの今～」です。

2019年12月、悲報が届きました。アフガニスタンで長年活動しておられた医師、中村哲さんが亡くなられました。中村哲医師の活動を支援するベシャワール会は、沖縄県が創設した沖縄平和賞の第1回受賞団体です。

「ここに必要なのは医療だけではない」。

中村医師とベシャワール会は、その活動を展開するアフガニスタンの地で、医療という枠を超え、用水路など灌漑施設の整備事業を行い、地域の農業振興の基盤をつくり、結果として10万人以上が農業に従事、安定的な仕事、そして食料などの生活基盤を得ることができました。

今年に入って政情が激変、アフガニスタンにおいても、亡くなった中村医師の、その志、遺志を受け継ぎ、ベシャワール会は活動を続けています。

それでは、お話しいただきます。ベシャワール会会長、村上優さま、よろしくお話しいたします。



## 2. 第1部 特別講演

### 「中村哲医師の事業を継いで ～アフガニスタンの今～」

ベシャワール会 会長

村上 優 氏

### ○村上

丁寧な紹介をありがとうございました。

ベシャワール会会長の村上でございます。

先ほどお話が出ましたように、2019年12月4日、中村哲医師が亡くなりました。彼はピースジャパンメディカルサービス(PMS)の総委員長でしたけれども、その総委員長を、アフガニスタンのPMSの職員の人たちの総意で村上が継いでほしいということで、それを引き継ぐことにいたしました。

日本がアフガニスタンにおけるいろいろな活動をするときの中心として、要としてほしいという、中村先生がされていたような期待を受けましたので、非力ですけれども引き受けることにいたしました。

今日は簡単に中村先生がどんなことをしてきたかということに触れながら、今、やはり問題になっていることを中心にお話をさせていただきたいと思います。

中村哲というのはどんな人かという、いろいろな側面がありますが、最後の平和ということにつながることは、私はやはり、彼は非戦の人でした。戦わない人でした。たとえ攻撃を受

けても、彼は統一発も撃つことはありませんでした。

彼の活動というのは1984年に始まりました。医療、水事業、農業という、この3事業が次々に行われたんですが、最初の医療は、基本的にはハンセン病の医療を中心に置いて、そして一般の感染症をしていた、そういう医療の展開でした。理由は、ハンセン病の医療というのは誰もアフガニスタンの中でする医師がいなかったからです。

その84年という年は、1974年にソ連がアフガニスタンに侵攻して以降、戦争が起こって難民がいっぱい出ていた。必然的に84年から赴任したときに難民医療に巻き込まれていったわけで、300万人の難民が当時ベシャワールにいました。

彼の発想のポイントというのは、難民にわれわれが一方的に寄与する、援助する、ではなくて、難民として来た医療者がいたり、看護師がいたりするわけですけども、医療者を束ねて、それを難民医療として展開していくということをしました。その結果において、その難民がアフガニスタンにまた戻っていくだろうから、その戻っていくところに診療所をつくって、それを迎え入れよう。当然その地域がハンセン病の多発地帯だったから、併せてハンセン病も行っていこうということをしました。

アフガニスタン東部の山岳地域にガラエ・ヌールという診療所をつくって以降、山々の中に、一番多いときには6カ所の診療所をつくりました。その診療所をつくるのにPMS基地病院というものをベシャワールにつくったわけですが、これは1988年のことです。それが軌道に乗ったころに2000年の大干ばつに遭遇していったわけです。

これに対して初めは井戸を掘るという事業を始めましたけれども、井戸は掘っても掘っても枯れていくという非常に強い干ばつの中で、彼は周辺に流れている、7千メートルクラスの山を水源としたクナル川から水を取ってこようという水路の事業を始めました。これは後に「緑の大地計画」というかたちでまとめていって、これを中心的に今日はお話をさせていただきます。

この水を引いていったというのは、命の水、飲み水ということもありますが、もっと広く、農業を復活させなければ、この荒れ果てた大地の中でアフガニスタンは復興しないということで、農業の復興を目指していったわけです。今は230ヘクタールを、国から貸与を受けて、そこに試験農場をつくって、さまざまな農業の活動をしております。

彼はこの医療、水事業、農業という中で、命をつないでいくということに念頭を置いていたと思います。そしていつも貧困がありました。そして、この40年間ずっと戦争が横で起こっています。そして最後には地球温暖化、その結果としての干ばつ、激しい気候変動に出遭うわけです。それを彼はアフガニスタン東部と、それからベシャワールというパキスタンの北西辺境州といわれていた西部、この二つの地域だけを見てきたわけです。

彼は「一隅を照らす」という言葉が大変好きでした。ひと所にとどまっていた、世の中の、初めはアジアと思っていましたが、世界の気候変動ですから、世界の全ての問題に処遇していくわけです。そして、その問題に対して彼なりの一つずつの答えを出していきました。

ヒンドークシュ山脈というものがアフガニスタンの中心にあります。アフガニスタンは山の国で、8割が山に覆われています。この山に降ったモンスーンが運んできた水分、この山にぶつかって降る雪、雨、これが水源なんですね。これが温暖化によって気候変動が起こって、雪がなくなっていきました。

昔、彼が山登りを行ったときの雪線、万年雪が残るのが3300メートルくらいのところまでは残っていたのが、今われわれが活動しているガラエ・ヌール周辺では、背後にある山が4500から5000メートルくらいあるんですが、その4500から5000メートルの雪が夏にはなくなります。そのために水が得られていかないという事態になっているわけです。

もう一つの問題が、アフガニスタンというのは一つの民族ではありません。非常に多くの民族。今はタリバンが出てきて、あれはバシュトゥーン族を中心とした民族ですけども、非常に多くの民族がいます。アフガニスタンでは中央集権のような一つの国家があったわけじゃなくて、民族があり、その中に部族があり、そして氏族があり、沖繩で言えば門中ですね。そして家族がいる。この中で仲良くなったり、対立したりしながら、ただで外敵が来たときには一つになって戦うというのが彼らのありようでした。

そのさまざまに対立するいろいろな集合体の中で、統一するのは信仰でした。イスラム教でした。このイスラム教は、ほぼ99%、アフガニスタンはイスラム教徒ですけども、このモスクは中村哲医師、彼はクリスチャンですけども、彼が設計して、水路に置いていったモスクです。いろいろな争い事があったら、ここで解決をするという、そういうような場も彼はつくりました。

そして、いつも貧困があります。この写真は彼がスライドとして初めに出した、1984年のころから出していたスライドですが、今でもこれが変わりません。そして干ばつでした。1998年にPMSの基地病院をつくって、その当時は六つぐらいの病院にその基地病院から医師を派遣して展開をしていたんですが、彼がほかの仕事で忙しくて、このガラエ・ヌールの渓谷になかなか来られなくて、2年ぶりに来たときに、この場面に遭遇したんです。ここは畑でした。水がなくなったために、畑が土漠化していったわけです。

その土漠化の中に、これは時間がなくて飛ばしますけれども、土漠化、砂漠化の中で水がなくて、干ばつで食料がなくなってきた、その国の中で非常に争いがたくさん起こってきたものをタリバンがまとめていって、そのタリバンが農村に寄与した非常に伝統的な、復古主義的なイスラム教の世界をつくったために、近代的な考え方をする都市部の人たちとは対立していったわけですが、そこで争いが起こったときに、9.11の世界同時多発テロの、アルカイダのオサマ・ビンラディンをかくまっているという理由で空爆がありました。

この当時、空爆が始まったのは2001年の10月17日でしたけれども、当時は大干ばつのさなかで、水がなくて、食料がなくて、そして、空爆で命が危うくなり、かつ経済封鎖もあって、そのために食料がなかったんです。食料がなくて、もうすぐすると、空爆は10月17日からですが、1カ月して11月には戦争が終わりました。

終わったときから、今ぐらいから冬に入ります。

カブールは、冬は氷点下21℃ぐらいにまでなるわけですが、餓死の危機があり、そして爆弾で死ぬ危機があり、そして今度は凍死の危機あるということが彼らの目前にあったんですが、そのときに彼は食料配給をしました。

今回は国連WFPが残って食料配給をしていますけれども、当時は誰もいなかったから、われわれベシャワール会で中村先生は私費で食料配給をいたしました。だけど、取りあえずはタリバンがいなくなって、新しい政府がまた戻ってきて、それを欧米が自由と民主主義という概念を中心に展開していったわけです。





ただ、その当時の風景。ここはダラエ・ヌールの渓谷からちょっと上流に行ったらとここで、この先にダラエ・ピーチというクリニックがあったんですが、われわれのそのクリニックの途中の道すがらです。スランプールという土地ですが、これは初めから土漠だったんじゃないんです。道路の上側、山側は全部農地でした。これが干ばつによってこの状態になっていったわけです。これは詳しいことはお話ししなくてもご理解いただけると思いますが、地球温暖化で山から雪がなくなってって、その雪解け水が頼りだった農業がほぼ壊滅していったわけです。

それから、雪、雨が降らないだけじゃなくて、雪解けするときに、あつという間に雪解けするものだから、大洪水が起こってくる。非常に荒々しい川の現象が起こってくるために、水を取る取り汲み口が壊されていったりして、ある意味でのインフラが全部壊れていくという状態で、これは加速化してまいりました。

そこで彼は「緑の大地計画」ということで、マルワリード用水路を建設しました。2003年から7年、足かけ8年をかけてつくりました。この用水路を見てその近くの地域から要請があって、さまざまな用水路をつくり、取水堰、水取り口をつくることによって復興をさせていこうという、その中で「PMS方式灌漑事業」というものが一つのかたちとして出来上がりました。彼の表現だと、標準設計が完成したと。これをもって、この地域だけではなくて広げていこうと2017年から始めていたわけです。その経過の中でガンベリという砂漠の中に230ヘクタールが灌漑されて得られた土地に試験農場をつくっていったという経緯です。

これは、皆さん農民の人が、難民となっていた人が帰ってきて、水が来るんだということで、自分たちも一緒にということと一緒に働いていた姿です。当然この人たちには日当を払います。彼らは日当がなかったら生活ができません。農業ができなければ生活ができないから仕方なしに、あるときはタリバン、あるときは政府軍、あるときには米軍の傭兵になっていきました。兵隊になって日銭を稼いでいたのが、そうではなくて農業で、復興させるための用水路で生活を支えていこうという方々です。多いときには千人ぐらいの人が毎日出ます。今でもだいたい200人ぐらいの方が働いています。

このとき彼が一番考えたのは、いわゆる日本の近代的なものではなくて、地元の人が地元の材料で、地元の人たちの力によって、修復できるものということで、地域性の濃い技術としてつくり上げていこうと彼は思いました。

これは私たちが住んでいる福岡県の筑後川という川です。暴れ川として有名ですが、そこに1790年に完成して、工事はもっと前から始まっていて、そこでできた筑後川の斜め堰、これは江戸時代につくったものが今でもつかわれています。

斜めに堰をつくって水をコントロールしていくという方法です。今は日本ではここぐらいしか残っていませんが、彼はここに行き当たったんです。日本式の、現代のスライドで堰をつくってというのではなくて、石を積んで、こういう斜めの状態にして水をコントロールしようという技術をつくりました。

いくつかの試行錯誤がありました。一番の完成形は、2019年2月につくられたカマ堰IIというもので、非常に斜め堰に近い構造をしています。

これだけじゃなくて、彼はそこから用水路を引いていって、先ほど司会の方が10万人の農民が言ったのは、このマルワリード用水路の周辺が10万人でした。ただ、今は全部で65万人が住むエリアに灌漑が展開しています。

ここにある緑はヤナギです。蛇籠という石積みをした石を、最初は鉄の籠なんですけれども、やがて鉄が腐った後にもヤナギの根がしっかりと石をホールドしてこの堰を守っていくという、こういう工夫でつくっていく。砂漠化したところに、この緑のじゅうたんが広がっていききました。水が来たところから水を地域に引いていって、村々が復活をしていきました。

これは最初にお見せしたスランプールですけれども、この状態が2003年。それから8年したらこの緑が戻ってきたわけです。太陽が非常に強いので圧倒的な回復力です。これも下の方のガンベリの地域に水が来て、貯水池をつくって、また水を出していくという構造をつくりました。2009年です。8年経ったらこの緑が戻ってまいりました。

池がP、Q2、Q3、Q4とありますが、これを上から見るとこのように戻っていった。今見ると元からこれがあったんだと思いがちですが、これは全部復興していった姿です。これを2003年から彼はこつこつとつくって今に至っています。米が穫れ、麦が穫れ、そして用水路をつくっていくと、必ずこうやって植林をして、植えた木は今年の4月までに130万本を超えます。

そしてここに、緑にしたところ、われわれが灌漑したエリアですが、1万6500ヘクタールあります。その1万6500ヘクタールの中で65万人が生活しているということになります。

今アフガニスタンは、またすごい干ばつが来て、そして飢餓難民、飢餓、餓死の危険があります。この緑のところのつくられた農地は65万人の農家を支えています。ここでつくられた作物は周辺の地域の非常に多くの人々の食料として提供ができていっているわけです。水がなければ、これはこういうふうではなかった。水を取り込むことによって、この状態をつくりました。

小さな丸でここには1から9までありますが、今11取水堰。新しい堰をつくってみたり、堰をつくり変えて水をうまく取り込んでいって、もともとあった用水路につないでいくと、それが広がっていくという、そういう展開があります。新たにマルワリード用水路のように1から10まで全部つくったところがもう一つ、マルワリードIIという用水路がございます。

そうやってきたわけですが、こういう状態を見たときに、この間ずっと戦争があったんですね。覚えておられるかどうか分かりませんが、2008年のときに、われわれの伊藤君という若い青年が向こうで殺されて亡くなりました。ある意味ではずっと戦争が横にあったわけです。

彼は、平和って何だろうかといったときに、こんなふうにも考えています。これは最近一番新しく出た『わたしは「セロ弾きのゴーシュ」の中から彼が対談の中で話したことです。『普通の一般民衆、これは大半が農民でありますけれども、こういった人々が安心して暮らせる状態、具体的に言いますと、パンと水、食べ物と清潔な飲料水、これさえあればアフガン問題のほとんどが私は片が付くと思います。少なくともこの戦乱も収まるだろうし、難民問題も解決するだろうというのが私の見方。というよりも、一般的な人々の見方でしょう。

これが平和なんです。

ずっと40年戦争があり、この2000年からはずっと干ばつの中で、生きることさえ大変な状況の中では、これが平和なんです。本来死ぬべき人が治って助かっていって、本来ならこの砂漠化で何人も難民を出したところから、水が流れてきて命がよみがえってくるというわけです。トンボは来るわ、フナが来るわ、アメンボが出て来るわ。で、カエルは鳴くわ、魚が入ってくるわ、鳥が来るわ、おまけに人間もそこで一緒に仲良く暮らしていく里ができていく。これは見ていて楽しいものですね。この楽しみだけは死ぬまで放したくない。

彼の平和のイメージというか、具体的な姿というのは、自然がそこに戻ってきて、自然に人間がそこで生活していることです。

最後に、「健康で命があること。三度三度ご飯が食べられること。家族と一緒にいること。これ以上の望みを持つ人が少ない」。アフガニスタンの話です。これは当たり前といえど当たり前のことなだけども、この当たり前のことを全然手にすることができていないということからこの言葉の意味を考えると、大変深いものがあるだろうと思います。

私はそこで出た一番重要な人権、ここからは私の意見ですけど、まとめのところですが、「生存権」こそ人権の根本ということを明確に素朴に語り、その意味を深く捉えることができる人がどれくらいいるんだろうかと私は思いました。

だけど、いや、きっと多くの人々に伝わるだろうと中村先生は祈ったに違いない。そう思うと彼はこの事業を継続してきたと思います。

先ほどもお話ししたように、2019年12月4日に亡くなりましたけれども、これはその2週間前にわれわれの事務局の中で今後のことを言い残していった、死ぬと思って出ていったわけではないから、事業説明をしていたときの中村先生の姿です。

亡くなった後ですけれども、つい最近、日本語英語が終わっていたのが、バシュト語グリー語という現地語に意訳された「PMS Method Irrigation Project Guideline」という、中村先生が標準方式をつくった「PMS方式灌漑事業ガイドライン」というマニュアルをつくりました。

その前に「アフガン緑の大地」というテキストをつくりましたけれども、それだけではあまりにも全体概観すぎるので、もっと具体的なマニュアルをつくりました。

これは先ほどお話ししたように、現地語に訳が終わりました。JICAの協力がつくりましたけれども、これを今度皆さんに配布して広げていこうと思っています。

PMSの事業は、ここにありますように、用水路の事業があって、一番はバルカシコートというところで去年から、中村先生が亡くなって初めて、中村先生がいなくて新しい堰をつくっています。

それから、中村先生がゴレークというところの住民に約束した、そこで新しい堰の計画を立てたりしています。それで先ほどお話ししたガイドラインのつくるものがあります。このガイドラインをもって研修をするという、ミランというところに2017年に研修所ができて、18年、19年と研修生が来て、そこでこの用水路のつくり方を学んでいくというプロジェクトがあって、こ

れを継続していこうと。

今度ゴレークでつくるときには、アフガニスタンのいろいろな地域から来た技術者と一緒に、堰を設計から施工管理まで含めて全部して、それを基に技術者の養成をしていこうという計画が立っていました。

農業の地帯ではオレンジ園が非常に広がってきたし、養蜂も盛んに行われているし、それから牧畜もごさいます。本当にさまざまな農業のトライアルが行われておりますし、グラエ・ヌールの診療所、残念ながら診療所の数はいろいろな経過の中で減ってきて、今はこの一つになってしまいましたが、ここではこの地域をかなり広くカバーして診療所の活動をしております。

これはバルカシコートの一帯新しくつくっている堰の取水堰です。取水口ですね。まだ完成していませんが、まずはこれだけすれば何とか今年の水が取れるだろうということで、去年つくって、今年の水がここから取れました。

これはガンベリという地域の、230ヘクタールの中にあるガンベリ農場というんですが、そこの中にあるガンベリ公園の中に、彼が亡くなった後に彼の記念塔ができました。そこにいる人たちは、われわれの中心的なメンバーのPMSの幹部の人たちです。

さあ、そういうふうにして今後は新しく展開していこうというときにタリバンが戻ってきたわけです。

中村先生は実はタリバンが戻ってくるだろうということは十分折り込み済みでした。ですが、要するに彼は、「水が善人・悪人を区別しないように、誰とでも仲良くなって、よそに逃れようのない人々を助けていく」というのが彼の2016年に書いたわれわれの会報への文章ですけれども、そういう考えでしたから、彼は誰が来てもそれらと一緒にあって、その現場の人たちの命を助けていく、命を助けていく、命を支えていくということを考えていました。

ですから、「いろいろなことが騒々しい世界とは無縁なところに平和に生きる道が備わっているのだ。私たちがまた必死だ。世界で何が起きようと、ひたすらシャベルを振るひ、水を送って耕し、その日を無事に過ごせたことに感謝をする」というふう述べていました。いろいろな状況があって、つらいことがあって、戦争が横であっていても、彼はこのことに。

今のアフガニスタンを理解するために、ちょっと背景を述べさせていただくと、タリバンというのは1994年に発足して、96年にアフガニスタン全体を統治しました。たった2年でこれができたわけです。ただ2001年に、今さっきの9.11のことを受けて、欧米軍によって1カ月で姿を消しました。だけど20年してまた戻ってきたわけです。

アフガニスタンは先ほどお話ししたように、さまざまな民族がいて、中央集権的な国家はなく、民族、部族、氏族、家族という構造の中で、この群雄割拠している状態をどう束ねていくのか。もともと統治をするジルガという自治組織がありまして、長老会と訳されていますが、この人たちがそういうところを統治していたわけですから、これはイスラム教によってバックアップを受けた組織です。この組織が国の中の地域をつくっているわけですが、タリバンというのは実はそこに依拠して活動しているところです。

ですから、こういう地域は、都市部はそうではありませんが、9割を占める農民、遊牧民はこの世界で生きているんです。この世界で生きているのがタリバンだったものですから、ある意味では非常に簡単に出てきて、すぐ全体をカバーするし、今度の事態を見ても、あつという間に、タリバンがもう一回戻ってくると、最終的には彼らが支配していくかたちになっていったわけです。

お話ししたように、90%の農民、遊牧民、この方々は伝統的なイスラム社会で生きているわけですが、この人たちは、ほぼイコール貧困層です。ただ、彼らは農民だったために、干ばつさえなければ食料自給率は100%でした。それが干ばつ、戦争という中で20%まで落ちてきて、今もう少し上がったかもしれないけれども、大変低いレベルにまで低下をいたしました。

この100年を考えてみて、イギリス軍が3回侵襲してきて、3回とも、1回はイギリスが支配した後、追い返しています。ロシアが来たときもそうでした。10年かけてロシアは撤退をしていったわけです。そのときはソ連といっていて、そのためにソ連は弱体化して、ソ連が崩壊していくという結果にもなりました。今度は米軍を中心とした欧米軍ということになってまいります。

中村先生はずっとこう言っていましたね。アフガニスタンの人による復興しかあり得ない。それしか続かないというふうに思っていました。だから、文明の名において一つの国を外国人が破壊したり、外国人が建設する、それは無理なんだ。「そこに一つの傲慢が潜んでいるんじゃないだろうか」ということをずっと、これは今から言っているのではなく、2000年に言ったわけでもなくて、1990年代からずっと彼は言い続けていました。

今も現状はあまり変わりません。ただ、2000年に始まった干ばつはさらに顕在化をして、2021年には、2016年、2018年、最近ではこの二つが非常に大きな干ばつでしたが、今年最大の干ばつです。

背後には、先ほどお話しした40年の継続した戦火がありました。今は戦火がなくなりました。それから、世界と同じCOVID-19も感染が広がってきています。人々には戦争どころではないという厭戦気分がまん延していたんですね。その厭戦気分がまん延したところにタリバンが入ってきたということにもなります。

それからもう一つ、米国だけでも2兆ドル、200兆円の金が、この20年アフガニスタンに投入されたんです。そのうちの半分は軍事費でした。あと半分は復興予算ということで民生でした。これだけのお金がアフガニスタンにしっかりと本当に入っていたならば、アフガニスタンはもっと違った姿になっていたんですが、だけど、この20年を振り返ってみて、農村が復興してあれほど農業が展開できているのは、われわれが展開した地域だけです。

あとの地域は、やはり干ばつが続いて、農業がなかなか復興しないままの状態になっていた。だから逆に言うと、多くの民は、非常に大きなお金が入っていたにもかかわらず、豊かさとは無縁のところでははずです。もしこれにもう少し違った民生が入っていれば、事情は変わってきたらうとは推測はできます。私は終戦国や大国のものが大変大きい中に、一部のアフガニスタンの人々だけに富が集中していくような構造をつくってしまったことが今回の問題になったんだろうと現状思います。

ところがアフガニスタンが今どうなっているかという、8月15日以降、経済封鎖の中にあります。米国、世界銀行IMFによる資金凍結が起こりました。実はアフガニスタンの国のお金、中央銀行のお金90億ドル、約1兆円はアメリカの銀行の中にありました。そのために、アフガニスタンの資金凍結をすると、ほぼお金がそこで押さえられてしまう。それで経済が回らなくなるので、内部より今は経済混乱が生じ、破綻が起こり、そして今から厳冬期を迎えています。

お金がなくなるといふのをどんなふうにも説明していか分らないと思って、ちょっといろいろ考えてみたときに、私は、電気でいうと、全停電、ブラックアウト。われわれは今、電気にすごく依拠して生活しているので、全停電が日本で起こったのは、北海道で地震が起こったときの函館でしたね。あそこは被災はしていないけれども停電をした。停電して、そんなに1日くらい停電したんでしょうか。それだけでも生活は全て止まってしまいます。

お金は、お金がいっぱいあるとかないとかではなく、お金そのものは働いて給料をもらう、その給料が今出せないんです。われわれのNGOで職員は104人いますけれども、お金が、給料が払えない。

この人たちが物を買えなくなる。それから、われわれは給料だけじゃなくて事業費がある。薬が買えなくなる。われわれは何とかして今、薬を手に入れていますし、いろいろお金の入れ方を工夫して事業を何とか維持できていますが、多くの企業やNGOはこれができないという状態、ある意味では全てのものが止まっていく。この止まっていくところに干ばつがあり、そして寒さがやってくるということで、非常に大きな人道危機が来ているというふうに思います。

私は、こういうような経済的な不安が社会的な不安につながって、そして飢餓とかが出てくれば、やはり人間というのは自暴自棄になっていった。また内戦が起こるんじゃないかと。皆さんたちは、20年前のタリバンのいた時期に戻ったと思っておられるでしょうが、私にとっては、20年前じゃなくて、ソ連が侵襲してきた、あのもう20年さかのぼった時代にさかのぼっていかば、その間に何人の人が戦争で亡くなったかと。前半だけでも200万人が亡くなっているんですね。

そのことを彼は、1994年の会報の中で「ケララ村の惨劇」として書き残しています。ケララ村は、内戦が起こって200万人が死んでいく一つの村に、1800人の村のうち1500人が殺されるといふ大きな事件がございました。今はたまたま平和を回復してバザールの賑わいがあるんだけれども、「そこには死者の沈黙が冷然と生者の営みを眺め、両者を隔てる壁が厳として存在する」といふふうに言っています。非常に冷たい、非常に沈鬱な、そういうことを感じるところになっている。

この内戦で死んでいく経過は、彼はアフガニスタンに関わった全ての者、武器を与えて戦争をおこなった人たちはもちろん、自覚なきアフガン人、自分たちだけじゃなくとも思っている人たち、人道支援で喝采を受けた外国人、アフガニスタンを語ったジャーナリスト、評論家、この人たちが、中村先生はこう言うんですね。「死者を踏み台にして生きた者は等しく、この「死者のまなざし」に戦慄すべきである。

少なくとも目前で展開されたこれらの事実を軽々と器用に総括することはできなかった。しかし今、生者の破局的な営み、死の力の跳梁を全世界に見るとき、犠牲者になり代わって、「自覚なき生者の驕り」を伝えずにはおれない。同時に、内戦で逝った200万の魂を鎮める祈りは、人が根底で共有できる希望を分かちあうことで真実となると信じているからである。」

そういう現実を、戦争の現実を、彼は横でずっと戦争があったところから事業をしてきて、彼が言う「根底で共有できる希望」というのは、用水路、言葉を代えればそういうことだろうと思います。それから医療。そういうことだと思いますが、それを分かち合うことで希望というものが分かち合えるんだということを言い続けたわけです。

さて、取りあえずタリバンがやってきました。8月15日以降われわれの事業はいったんは休止しましたが、8月21日に診療所がスタート、9月2日には農業がスタート、そして10月7日には用水路の灌漑事業が完全に全体的に再開いたしました。この間、小さいことはいろいろありましたけれど、こうやって3事業ともに復興ができました。

ちょっとそれをご紹介します。これはガラエ・ヌール診療所の女性の待合室で、患者さんがどんどんあふれてくるようになりました。これはブルカですね。ブルカはタリバンに言われてかぶったんじゃない。これが彼らの普通の外出着なんです。ずっと歴史的にこういうことを、ずっとタリバンが来る前、いろいろ言われる前からこういう生活をしていたんですね。

これは、治療を受けに来た、タリバンの人も治療をしているという、そういうこと。それからガンベリ農場という、230ヘクタールのところでミカンが今、2万本くらい柑橘類が植わっていて、レモン。レモンを酢の代わりにご飯でも何にでもかけて食べる習慣があって、この収入。ミカンを植えたり、それから酪農もあります。これは10月6日に届いたトモモロコシですね。妻が春に終わると、今度はトモモロコシを植えて、トモモロコシの収穫がある。それから米を10月9日に収穫しました。

「干ばつ干ばつといっても、ちゃんとやっているじゃない」と。これは水があるからなんです。これはアフガニスタンの姿を代表していません。20年間こつこつこつてきた用水路が、結局はこういう恵みをもたらしているという姿です。

用水路は、9月6日にスタートしたときには、こういう状態から始まって、植林をずっと続けていくことは続けていたんですが、13日から大きな石を運び出して、この用水路のちょっと橋みたいになっているところは、これは土砂吐といって土砂を流すための水路ですが、そこの上に仮の橋を置いて、そこから斜め堰の工事が今始まりました。今さっき採った石を敷いていくわけですね。

ただし、われわれの持っている機械は、このエクスカベーター2台と、トラック4台と、ブルドーザー2台です。これから川の水位が冬になると下がっていきます。下がっていったところで、われわれの工事が本格化するときには、これだけの機械では足りません。

この機械は実はガソリンの問題を、農業生産物を買った金でまかなって、それをガソリンに回して工事が始まったんですが、今からはレンタルの重機をたくさん導入して大規模工事が始まらないといけないんですが、このお金をどうするか。経済封鎖の中で事業資金が投入できないという事態の中で、今このことをわれわれは考えながらですが、給料をしばらく待ってもらっても、この事業で堰に取り掛かれないといけないということになる。

実は2018年にもかなり大きな干ばつが進行したわけです。そのときUN国連、具体的にはWFPですけども、警告を発して、飢餓線上にいる者が830万人、餓死線上が330万人という報告をいたしました。これが2018年のことです。このときは中村先生も移ってきて、横にいるのは副院長のジア先生ですけども、この2018年の干ばつを訴えました。訴えても、なかなか日本では、分かっていた人しか分かってもらえない。当たり前のことですが、そういうことでした。

ところが2019年、これはガラエ・ヌール渓谷のシキアライ(?)というところで、われわれの診療所のある渓谷ですが、この下の方に用水路が流れていて、そこはいいんですが、ちょっと山手の方に行くところには水がないときに13の大口径の灌漑用の井戸を掘っています。ところが、この井戸も完全に枯れました。そのために水が提供できないという事態で、この仕切られているところに春の麦の収穫まで今年はできたんですが、その後のトモモロコシや米がつかなくなって、ちょうど今くらいに麦の種付けをしないといけません、これもできていません。ということは来年の収穫がもうありません。この1年、食料がここでは獲れていない。これが先に続くだろうという予測が続いています。

これはもう少し下流のプディアライのところ。同じようなことです。この非常に乾燥に強い木だけが残って、畑はほとんど壊滅状態です。この春にWFPは警告を出していて、人口4000万人のうち、飢餓線上が2000万人、餓死線上が1500万人と発表しました。

これは前政権の時代です。このときにも大変大きなアピールをしたんですが、あまり動きがなかった。10月25日にもうちょっと克明な報告をWFPが出しました。2280万人が冬の間に深刻な飢餓に直面して、そのうち870万人が緊急事態の飢餓に陥ると推計すると発表しました。この緊急事態の飢餓というのは、餓死という意味です。

ピースリーという事務局長が、このことを何度も言っています。11月になって記者会見をしたときには、もっと激しい口調で、この飢餓が出てくる背景には、一つは大干ばつがあって作物が獲れないけれども、もっと大変なことは経済封鎖。経済封鎖というのは人為的なことで、人がすることです。

「人がすることによって870万人の人が死ぬんですよ」ということを世界に警告しました。これはあなたが大きな数字ではなく、彼が大きく言っているわけではなくて、現実なんです。

それを少しお教えすると、先ほどのわれわれのあいったエリアはちゃんと穀物も獲れるんですが、あれはナンガルハル州というわれわれの活動地域ですが、ちょっと回りのヘラートという西の方のかなり大きな都市は、この状態です。これは畑ですね。平野部でもありません。これはヘラートです、ヴァルタク州では、この状態です。これが今のアフガニスタンの現状なんです。

これはBBCが出した、これはわれわれのデータではありません、バードギース州の完成した大地のことを示していました。BBCもイギリスの放送局で、ずいぶんタリバンの女性うんぬんと初めは言っていたんですが、現実、彼らが現地に行って報道の中に入れて見てみると、この状態を目の当たりにしたときに、女性の問題を理由に、タリバン政府だということで援助しないということになると、ピースリー局長が言ったように多くの人が死ぬ、それはそれでいいのかということ少し意見が変わってくるわけですね。

今、手を差し伸べようとしているのはロシアと中国です。それとパキスタン。大きな、ほとんど欧米は今でも全てノーという状態です。われわれはそういう中で、もう8月24日、15日から十日もしないところでわれわれを呼んで、タリバンと用水路をどうするかと協議が始まりました。実はこれがうちの職員です。この後のひげのたっぶり出ているのはタリバンですけども、協議が始まりました。

より重要なのは、これはタリバンですけども、ここにいる人は前政権の灌漑局の局長です。ですから、タリバンと前の政権とわれわれと一緒に話をして事態を進めていこうというふうになっているんです。現場はこうなんです。たぶんこういう写真は日本には全然伝わっていません。彼らは9月にもこの堰のところに現実に来て、いい仕事だと大変感激をして、進めてほしいというふうには言っていました。

これが最後のスライドですが、こういうふうにいる人今、私はかなり大きな声で言っている感じになっていますが、中村先生もずっとこのことは言っていました。だけどこの声が届かない。2001年、2000年、タリバンに国際的な制約でどんどん経済封鎖が行われていった。今ほどひどくはないんですが。そして援助も届かない、干ばつがひどいという中で、彼が宗教儀式として、異教徒である仏教ですから、それを爆破したという事件を前に、文化財を壊したということで、すごく大きな非難がありました。

そのときに彼が述べた言葉です。「私たちに信仰は大切であるが、アフガニスタンの国情を尊重する。暴をもって暴に報いるのは我々のやり方ではない。餓死100万人といわれるこの状況の中で、今仏教の議論をする暇はないと思う。平和が日本の国是であり、少なくともベシャワール会PMSは、建設的な人道的支援を忍耐をもって継続する。」

これは用水路につながっていくんですね。医療だけではなくて、用水路につながっていくんですが、「われわれはアフガニスタンを見捨てない。人類の文化とは何か。文明とは何であるかを考える機会を与えてくれた神に感謝する。真の「人類共通の文化遺産」は、平和と相互扶助の精神である。それは我々の心の中で築かれるべきものである」というふうにと平和のことを締めくくっています。

このように、ずっと危機的な状況の中でも、事業をもって、事業をしながら、最も貧しい人たちにその事業を届けるということ、そういうことを中村哲は続けてきたわけですね。亡くなった後も今われわれは、こうやって新しい事態が起こって、それこそわれわれが遠くない将来、近い将来タリバンが戻ってくるだろうと予測は立てていたけれども、8月15日というのは突然でした、われわれにとっては。だから慌てました。

そして職員たちも、うちの職員は、やはりさまざまな民族構成で、バシュトゥーン人が多いですね。全体の人口の8割はバシュトゥーンですからバシュトゥーン族が多いんですけども、だけどハザラの人いれば、タジクの人いれば、それから元北部同盟に入っていてタリバンと戦っていた人もいれば、その反対でタリバンの兵隊でいた人もいれば、さまざまな人がいるんですね。

だから、104名の職員は全員が初め安心したわけじゃなくて、ある人は安心し、ある人は恐怖を感じた。その流れの中で、この1週間を過ごして戻ってくる人、2週間すぎて戻ってくる人。だけど、ひと月半で全員が戻ってきました。今、自分たちの力でこの国をもう一度つくり直さなければいけないという思いがあって。

「殺される、殺される」と初めは思ったけれど、そういう事態は実際は起こっていないことを目の当たりにして、われわれの職員全員が戻ってきました。女性も含めて戻ってきました。私はやはり今、日本がマスクミを通して知るアフガニスタンというのは、われわれから見れば、事実ではないとは言わないけれども、ほんの一部の事実だけが伝わっている。多くの事実、しかも90%の人口の方が今飢えていて、半分以上の方が飢餓の中から、その1000万人弱の方、800万人の方が死ぬかもしれない危機にあるということは一切伝わっていません。その世界の中でわれわれは、現実の今の事業を、先ほどご紹介させていただいたように継続することによって人々の支えになっていきたいと思っています。

そういうときに彼が、彼というのは中村哲ですが、残した言葉は非常に多くあります。

本もたくさんありますし、会報の中に出ている、われわれが普段接するような本もあるし、週報といって、彼はずっとこの事態を毎週のようにわれわれのところにレポートしてきて、その週報が非常に膨大にあります。

そういう言葉の中に、彼の見た事実、そこから何を判断したかということ、そして、そこからどんなふうにすべきかということについて、未来はこういうふうになるんじゃないだろうかという予測も含めて、ずっと山のような彼の言葉がごさいます。それをわれわれは道しるべにして事業を進めていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。



#### ○司会

どうもありがとうございました。ベシヤール会の活動、中村哲さんの考え方、そしてアフガニスタンの現状、ここからまた後半、共に考えていきたいと思います。

どうもありがとうございました。拍手を送りたいと思います。

村上会長の話にもありましたが、中村哲さんの書き残した本、言葉が多く残っているということ、あらためてもう一度その内容も確認してみたいと思います。

戦後76年を迎えています。その中で、今話がありましたように、世界的な情勢、政情、いろいろと動きがあります。知らないことも山ほどあります。戦争、紛争と呼ばれる争い事、さらには、それらを原因とする貧困や飢餓、暴力や災害。先ほどは環境問題のことなども含まれておりました。

私たちは平和を願う。

そして平和への思いを広げていきたいと多くの人が思っています。その中で戦争体験者の方から私たちが聞かせていただいた貴重な話、それをあらためて今後の世代へどうつないでいくのか。その思いを引き継いでいくことができるのかどうか。

そのような中で一つの活動があります。沖縄戦で動員されたひめゆり学徒隊の生存者の方々を中心に設立されたのが、ひめゆり平和祈念資料館です。糸満市に設立されたその資料館、今まで体験者とその思いをつないできました。その思いを2018年に初めて戦後生まれが引き継ぐかたちとなりました。戦争体験者の記憶、思いを引き継いだ資料館の館長にこれから「びーすふるシンポジウム」招待講演をお願いいたします。ひめゆり平和祈念資料館館長、普天間朝佳さまです。よろしく願いたします。

(カット1 了)

### 3. 招待講演

#### 「ひめゆり、次世代へ ～リニューアルと新しい取り組み～」

ひめゆり平和祈念資料館 館長  
普天間 朝佳 氏

#### ○普天間

皆さま、こんにちは。ひめゆり平和祈念資料館の普天間朝佳です。

どうぞよろしく願いたします。

これから30分ほど、私の働いている資料館のリニューアルと新しい取り組みについてお話させていただきます。よろしく願いたします。

最初に自己紹介をさせていただきます。私はひめゆり資料館が開館した年、今から32年前になるんですけども、その年に採用されて以来、資料館で働いてきました。でも、何か平和のために尽力するんだという強い志があって資料館に入ったわけではありませんでした。たまたま資料館の採用の募集があって、そのときに何かやりがいのある仕事ができそうだという、本当に軽い気持ちで資料館に入ったんです。

私の祖父も、いとこたちも沖縄戦で亡くなっているし、沖縄戦に関する本や映画はそれまで見聞きしてはいたんですけども、本当の意味での戦争の悲惨さというものをもっと知っていませんでした。今から思うと、今から振り返るとそう思います。資料館で働くようになって、ひめゆりの皆さんと仕事をすることで、彼女たちから体験を聞き取り、そしてその思いを受け取っていく中で、戦争というものがいかに悲惨であるか、いかに大切な人たちの命を奪っていくものであるかということを実感していったんです。

資料館の館長は歴代、開館以来ひめゆりの体験者と同窓生たちで担ってきたんですけども、皆さんご高齢になったので、先ほどお話がありましたように、2018年から私が館長に就任することになりました。

全国のマスコミでも、戦後生まれの館長が誕生したということで取り上げていただいたんですけども、実はとてもひるんでいたんです。前館長の体験者の島袋淑子さんの存在があまりにも大きくて、果たして私に務まるのだろうか。

でも、島袋館長から、「あとは安心して普天間さんたち職員に任せられます」という言葉を聞いたとき、こんなにこれまで30年も彼女たちと仕事をしていた自分がおじけていてどうする、まづ何よりも彼女たちに安心してもらわなくてはと思って、引き受けることにしたんです。

本題に入る前に、資料館の現状についてお話ししたいと思います。報道でご存じの方もいらっしゃると思うんですが、この2年にわたるコロナ禍で、資料館は86%、90%近く入館者が減少しているんです。この入館者の減少は、入館料で運営している私たち民間の当館にとっては、本当に存続が危ぶまれるほどの大きな危機です。

しかし一方で、多くの皆さまから支援の輪が寄せられています。これまでに1万人を超える皆さんから7600万円余りのご寄付が寄せられています。新潟の中学生でしたか、「僕は小遣いも少なく、いるんなことに使ってしまうので、微々たる額ですが、お送りします」ということでご寄付が送られてきて、とても励まされました。

それから、この写真にあるように、ミュージシャンのMONGOL800のキヨサクさんが、当館支援ライブの配金の収益金を寄付してくださいました。それから、地元の糸満市や中城村の自治体から、市内、村内の小中学生の入館チケットの購入、そして配布を通じた支援をしてくださいました。寄付を寄せてくださった皆さまのこれだけの人数と、そしてこれだけの額に本当にびっくりすると同時に、多くの皆さんがひめゆり資料館は絶対になくしてはならない大切な場所であると思ってくださっていることをあらためて実感し、胸がいっぱいになりました。当館に心を寄せてくださった皆さまに、この場を借りましてあらためて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

表題にもありますように、今年の4月に当館はリニューアルを行いました。リニューアルのテーマは、「戦争からさらに遠くなった世代へ」です。開館30年経って、現在資料館に来館される若い世代の皆さんは、祖父も戦争体験のない世代、戦争からさらに遠くなった世代になっているんですね。その世代にもしっかりと伝わるような展示のために今回リニューアルをすることにしました。

この写真は、リニューアルの展示をご覧になっている元ひめゆり学徒隊の証言員の皆さんです。皆さん時間をかけてじっくりご覧になっていただいて、「イラストなどを使って分かりやすくなっている」とか、「当時の私たちの気持ちまで表現してくれている」とか、「これなら子どもたちもしっかり伝わるよ」と喜んでくださいました。それを聞いてほっと安心したんですけども、今日は



リニューアルによって私たちの資料館がどのように変わったかということを中心にお話しさせていただこうと考えていますが、その前に、沖縄戦とひめゆり学徒隊についても、ごく簡単にお話ししたいと思います。

76年前、沖縄はアジア太平洋戦争の終り末期の戦場となり、日米両軍による激しい地上戦が戦われました。90日以上も激しい砲撃が続いて、20万人余りの人々が亡くなったんです。そのうちアメリカ兵は1万人余り、本土出身の日本兵が約6万5000人、沖縄県民は全戦死者数の61%に当たる12万人余りが亡くなったんです。これだけ沖縄の人々が犠牲になったのは、生活している場所が戦場になったからであり、軍と民間人が入り交じっての戦いになったからでした。

この沖縄戦には、兵士だけでなく、一般の住民も、そして10代の男女の生徒たちも動員されました。その中に戦後ひめゆり学徒隊という名前と呼ばれた、沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校の生徒たちもいました。師範学校は教員になるための学校ですね。今でいうと大学の教育学部ですね。県立一高女は、小学校を卒業後、受験して進学する上級学校の一つでした。二つの学校は同じキャンパス内に建てられて、姉妹校のような間柄になっていました。ひめゆりというのは、この学校の愛称、ニックネームです。

1945年3月23日、ひめゆり学徒隊は現在の南風原町にあった沖縄陸軍病院に動員されます。そして3カ月以上にわたる激しい過酷な沖縄戦の中で、動員された240人のうち、半数以上の136名が命を失ったんです。沖縄戦から40年近く経った1980年代、ひめゆりの人たちは、自分たちが体験した沖縄戦の実相を伝えるために、平和資料館の建設を決意します。約7年間の紆余曲折を経て、1989年にひめゆり平和祈念資料館が開館します。

開館後、元ひめゆり学徒の皆さんは資料館の証言員となって、展示室でこの写真のように説明をしたり、資料館の内外で講話活動などを通して、自分たちの戦争体験を伝える活動を始めます。彼女たちの語りからは、戦争の悲惨さが本当によく伝わるといって、写真にあるように、多くの皆さんが熱心に耳を傾けてきました。彼女たちは戦争体験を伝える仕事だけでなく、資料館のあらゆる仕事に携わり、開館以来、資料館の運営を中心となって担ってきたんです。ひめゆり資料館は戦争体験者が建設し、そして運営してきた世界でも類のない平和博物館なんです。開館30年で2300万人の皆さまがご来館してくださっています。

ひめゆり資料館は元ひめゆり学徒の皆さん、証言員の皆さんがいなくなった後も、この資料館で沖縄戦やひめゆり学徒隊のことを伝え続けていくために、次世代の継承に取り組みます。体験者の証言の映像を制作して、それを展示室で上映したり、さっき言ったような展示のリニューアルをしたり、そして戦争体験を伝える活動を継承する戦後生まれの職員を育成してきたんです。現在、資料館での運営や戦争体験を伝える活動は、私たち非体験者の職員によって担われています。

ここからはリニューアルのお話です。今回のリニューアルの特徴としては五つ挙げられます。一つが、イラストを活用して、伝わりづらかったことを分かりやすく表現したこと。二つ目が、生徒たちの笑顔の自然な表情の写真を効果的に活用して、親しみやすくしたこと。三つ目が、「ひめゆりの戦後」という新しいテーマの展示を追加したこと。そして四つ目が、テキストも若い世代が理解しやすいように、伝わりやすいように表現を工夫したこと。最後に、戦後生まれの職員が中心になって実施したことですね。開館のときの展示も、それから2004年の1回目のリニューアルも体験者が中心となって展示づくりをしてきたんですけど、今回は私たち戦後生まれの職員が中心となってリニューアルを進めてきました。

具体的にリニューアルの展示を見ていきたいと思います。これは今始まりますね。ちょっと展示中の様子をご覧ください。これは第1展示室ですけども、資料館は五つの展示室によって構成されています。

第1展示室のテーマが「ひめゆりの学校」です。ひめゆり学徒たちが学んだ学校や学校生活の様子が描かれています。これは入口にある大きなイラストですけども、朝、校門までの並木道を登って行く生徒たちを描いたものです。セーラー服に皮のかばん、そして黒い革靴、黒いソックスと、今の中学生や高校生たちとも共通するものが多いんだと絵にしてみても思いました。

展示室の様子を見てみます。このように写真とかイラスト、実物などを使って学校生活を表しています。今回、先ほどもお話ししたように、生徒たちの生き生きとした表情の写真を効果的に使っています。例えばこの写真、左側の写真はリニューアル前に展示していた写真です。そして右側はリニューアル後に展示した写真ですけども、実は同じ日に同じ場所で、同じ人たちを撮った写真なんです。でも全然違いますね。左側は非常に硬い表情をしているのに、右側は笑顔だったり、すまし顔だったり、本当に自然な表情をしています。

こういう自然な生徒たちの表情の写真を効果的に使うことで、今の生徒たちにも当時の生徒たちを身近に感じてもらって、彼女たちが体験したことも自分たちの世代に起こったことなんだということを実感してもらいたいなと考えたんです。

写真とかだけではなくて、このようにイラストも今回、何力所かに展示しています。これは授業の様子です。体育の様子。これは歩きながら友達とおしゃべりしている様子ですけども、写真はどうしても記念写真的なものが多くて、生き生きとした学校生活がなかなか伝わるものが少ないですね。イラストならそれが可能になるのではないかなと思ったんです。

第1展示室の後半のテーマは「軍国少女を育てた社会と教育」となっています。ひめゆり学徒たちが軍国少女へと育てていく過程が描かれています。ちょっとこれも中を見てみます。

当時、生徒たちは小さい頃から、「この戦争はアジアを繁栄させるための、アジアを平和にするための戦争だ。だからいいことなんだ」と教えられてきたんです。戦争に勝つことが何よりも最優先され、戦争に勝つためには、たとえ食べるものが少なくても我慢しなければならない。ぜいたくをしてはならない。おしゃべりしてはならないと言われてきたんですね。あらゆるものを戦争に勝つためにさげらんだ。いざとなったら自分の命を捨てても戦争に協力するんだと教えられてきたんです。だから戦争に協力していくのは当然のことであるし、また誇らしいことであると考えていたんですね。

この写真は沖縄戦の1年前の一高女、ひめゆりの学校の最後の1年の出来事を表したものです。動員作業とか看護訓練などの戦争の準備が本格化していく一方で、学期試験だったり、教育実習だったり、学芸会などの毎年行われている学校行事も行ってたんですね。日常と非日常が同居していたんです。そして、その翌年の1945年3月23日、生徒たちは沖縄陸軍病院へと動員されていきます。

続いて第2展示室ですね。第2展示室のテーマは「ひめゆりの戦場」です。ひめゆり学徒が体験した戦場の様子が展示されています。ちょっとこれも中の様子を見ていきます。これが続きですね。第2展示室でも、絵や写真や実物などを使って戦場の様子を表しています。

このイラストは陸軍病院壕の中を表したものです。病院といっても建物ではなく、トンネル、丘に掘られたトンネルのような壕が病院だったんですね。天井も壁も土がむき出しでした。その中に寝台をつくって、負傷した兵士たちを収容したんです。

これは病院壕内の手術場を描いたものですけども、軍や看護婦さんたちが手術をしている傍らで、手術をしている場所をろうそくで照らしたり、患者を押さえるのが学徒たちの仕事だったんです。麻酔もあまり効かない中で手足の切断手術が多かったようですけども、手術用のござりて手足を切断するときの激しい痛みで大人の大人が暴れ回って、それを押さえるのがとても大変だったそうです。

こういうイラストは、体験者の証言を基に、体験者とイラストレーターと資料館の職員が共同作業で仕上げたものです。何度か体験者に見てもらって、修正をして完成したものです。

このような、壕から掘り出された、学徒たちにとっては遺品になっているものですね。下敷きとか筆箱は学徒たちが戦場で持っていたものですが、彼女たち、元ひめゆり学徒の皆さんが資料館をつくる時に壕の泥の中から発掘して、それが今展示されているという状況です。戦後40年ぶりに彼女たちは壕に入って行くんですけども、泥の中から学友の遺品が出てきたときに、泣きながら「こんなに長い間放っておいてごめんね、ごめんね」と謝りながら掘る作業をしたそうです。

第2展示室の最後のテーマは、ここにある「解散命令と死の彷徨」です。学徒隊に解散命令が出されたときの状況。そして学徒たちの死亡月日、死亡場所。アメリカ兵に収容されていくときの様子が展示されています。

この「アメリカ、ひめゆり学徒の収容」というテーマで書いているんですけども、アメリカ軍に収容されてくときの展示は今回初めて展示しました。元ひめゆり学徒の皆さんが展示室で立って説明しているときに、「なぜあなたは生き残ることができたんですか」とか、「その後、あとどうなったんですか」という質問をよく受けていたんですね。それに答えるものとして今回、アメリカ軍に収容されていく様子を展示しました。

この部屋は第3展示室、「ひめゆりの証言映像」というテーマの部屋です。体験者の生き残ったひめゆりの人たちが証言している映像と、そしてアメリカ軍が撮影した沖縄戦の映像、リアルな沖縄戦が、死体も出てくるんですけども、そういう映像が上映されています。今回、体験者の映像の証言の字幕に英文を追加しています。外国の方がぜひ内容を知りたいということをよくおっしゃっていたものですから、英文を新たに追加しました。

これが第4展示室です。「貧困」というテーマの展示室です。壁全面に亡くなった生徒や先生の写真が貼られ、生き残った人の戦場の手記の大きな本が並んでいます。この部屋は来館者の皆さんが一番心に残る部屋だということで感想を寄せてくださる部屋なんですけれども、この部屋と先ほどお話しした映像の部屋は、今回のリニューアルでもほとんど変えませんでした。体験者の声の皆さんに届けられる部屋だということで、とても大事だと考えていて、この部屋と証言映像の部屋には今回はほとんど手を付けていません。

そして、これが第5展示室。新しく追加した「ひめゆりの戦後」というテーマの展示です。生き残ったひめゆりの人たちが、生き残ってどういう思いでいたのかとか、なぜ平和資料館をつくったのか。そして、開館後はどのような活動をしたのかということをお話しています。

この展示は2003年、今から十数年前の企画展「ひめゆり学徒の戦後展」が今回の展示の基礎になっています。この2003年の「ひめゆり学徒の戦後」の企画展を提案したのは、当時学芸員だった私でした。

実はその企画展の提案をしたときに、ひめゆりの皆さんから反対されたんです。生き残ったひめゆりの皆さんは、戦後、戦争を生き残ってよかったとみんな思っていたわけじゃないんです。学友と一緒に陸軍病院に動員されて、一緒に活動して、一緒に砲撃の中を逃げ回っていたのに、学友だけが亡くなって、自分は生き残ってしまった。「死ぬも生きるも一緒よ」と誓い合った学友に申し訳ないという思いを抱くようになるんです。

そして生き残った生徒たちは、亡くなった学友のご遺族、特に親御さんに会うのもとてもつらいことでした。直接言われたわけではないんですけども、遺族にとっては「なぜあなたは生き残ることができて、自分の娘は死んだんだ」と考えているのではないかと思つて、会うことがとても怖かったです。

そのような思いだったので、生き残った自分たちが取り上げられるような、スポットライトが当たるような戦後の展示などをやるという気持ちにはならなかったんです。

でも私は、何回か来館者の皆さんが、どうして生き残ったのかとか、その後どうなったかを知りたいがまま、私たち職員も、皆さんが戦後どういう思いでいたのかを伝えることはとても大事なことだと思つてお話をし、やっと了承していただくことができたんです。

今回それが常設になってよかったなと思つています。

戦後、沖縄戦で親たちが亡くなってしまって、たくさんの孤児が生まれました。それで孤児院をアメリカ軍が開設するんですね。これはそこで世話をする孤児院の先生になっているひめゆり学徒。この方が当時17歳のひめゆり学徒ですけど、この方自身も幼い顔をしていますので生徒と見分けがつかないかもしれないんですけど、子どもたちを鬼ごっこで遊ばせている写真ですね。そういうひめゆりの戦後のことが分かるような展示をしています。資料館の開館したこととか、その後の活動の様子をお話しています。

開館後のリニューアルについての来館者の感想ですね。

一番多いのが、やはり「明るくなった」という感想が多かったですね。照明を明るくしたこととか、展示の壁を白くしたこともその理由だと思うんですけども、それだけではなくて、第1展示室自体がすごく明るい雰囲気になったことが、そういう感想になっているのではないかと思います。

もう一つが、「分かりやすくなった」。これは先ほどから話しているように、イラストにしたり、映像とか写真、見て分かる展示を今回増やして、あとテキスト、文章も若い世代にもできるだけ分かりやすいような文章に変えているので、そう思っていたのではないかと思います。

あと、「怖くなくなった」というのがあるんです。どうしても中学生や高校生の中には、平和資料館に行くのが怖いものを見せられるんじゃないかと思う子たちがいるようなんです。でも、その子たちが



「怖くなくなった」という感想をわざわざ書いてくれているので。もちろん資料館の中には当時の沖縄戦のときの映像もありますし、写真もあるので、怖い場面はあるんですけども、でも全体として、学校生活の様子から始まって、当時の生徒たちを身近に感じてもらうことが、怖いものを見せられたんじゃないかと思つていただけることにつながっているんじゃないかと思つています。「よかった」というのは、やはり大事な遺影と証言があってよかったとか、どのように変わるのかが心配していただけた、いいものになってよかったということだと思つていただけた、そういう感想もありました。

次に、リニューアルの話は終わりまして、コロナ禍の中の私たちの資料館の「新しい取り組み」についてお話しします。

コロナ禍で来館する学校が激減して、対面での平和学習も難しくなっていますので、ひめゆり資料館でもオンラインによる取り組みを始めました。一つが「ひめゆりの沖縄戦」というプログラムですけども、これは実際今でも資料館のホールでやっていた平和講話をオンラインでやるものです。

そして二つ目、「絵で見る、ひめゆりの証言」というプログラム。これは体験者の証言に基づいて描いた絵を何枚か見ながら、この体験者がどういう体験をしたのかとか、そのときにはどんな気持ち

などをお話するプログラムです。これは事前学習に本当にオススメだと思います。それから「ひめゆりの沖縄戦」というオンラインの講話も事前学習にいいんじゃないかと考えています。

三つ目が、オンラインガイドツアーです。これは文字通りオンラインで展示室を案内していくプログラムですけども、質疑応答にもオンラインでお答えしています。ぜひ今日お話を聞いてくださった皆さまにオンライン平和学習を考えていらっしゃる方がいましたら、どうぞ活用ください。詳しいことは当館のホームページに掲載していますのでご参照ください。

そして、もう一つですね。今、青年海外協力協会（JCOA）沖縄事務所とも共同でプログラムを開発しています。これはオンラインでの事前学習、講話だったり、絵で見るひめゆりの証言だったり、そして資料館の見学、見学後のディスカッション、それから事後学習としての振り返りという四つを組み合わせたプログラムです。

インプットもあるし、アウトプットもある、アクティブな、子どもたち自身が動いて、考えて、発言して、発信するという主体的な平和学習になるのではないかと期待しています。今、来年の実施に向け準備中です。いろいろ検討したり議論したりしてつくっている最中です。

最後に、皆さんに見ていただきたい映像があります。元ひめゆり学徒の証言員の宮良ルリさんの映像です。2分半の映像ですけども、どうぞご覧ください。よろしくお祈りします。

(映像視聴開始)

○宮良

すると上から、ダダダダッと爆弾が投げ込まれたんです。真っ白い煙がもくもくと立ちこめ、一寸先も見えず、みんなそこに投げ飛ばされ、のたうち回り、落ちてきた岩にしがみついて、「お母さん、助けて、お母さん、助けて、お父さん、助けて、先生、助けて」。言えば言うほど苦しい。でも言わずにはおられなかった。助けて、助けてと叫び続けながら、次々と亡くなったと思います。私は死体の下敷きになって、もがき苦しんでいた。

あの当時はガス弾が、アメリカ軍が投げ込む。そのときはタオルを水にぬらして、鼻と口をふさげばいいと教えられていた。だからみんなタオルをズボンに引っかけていた。だから「火事だ、火事だ」と言ったもんだから、水はどこだ、水はどこだと私は苦しいの中から叫び続けた。近くにいた兵隊らしき人が「小便して口をふさげ」と言った。それで私はタオルをズボンから抜き取って、ズボンの上に当て、小便をして鼻と口をふさいだ。それでも苦しい。もう苦しくてたまらない。助けて、助けてと叫び続けているうちに私は意識を失ってしまった。

爆弾を投げ込まれて、3日、友達が死んだということが初めて分かった。言われて、よくよく見ると、死んで3日も経つ。壕の中はやっぱり腐りやすいんだろうね。ぱんぱんに膨れ上がって、ぼろぼろ折重なっている。はらわたが出ている人もいる。首がちぎれている人もいる。傷がね、みんなもう腐ってきてるんですよ。それを見て初めて友達が死んだということが分かった。

沖縄戦で、もうたかさんの人を失った。友達を失った。先生方を失った。その死んでいく人の現場を見た。そのことが私のね、心の奥までも染みついていて私は思うの。戦争はしてはいけないということ、はね、私が死ぬまでそれは持ち続けることになるんじゃないかと思っているの。

本当に、みんな生きたかったのよ。生きたかったけど、生きることのできないで死んでいったと思うのね。だから、その人たちの分までも、その人たちの、その生きたいという姿を見ている私だから伝えなければいけないと。

(映像視聴終了)

### ○普天間

宮良さんの証言の映像でした。

宮良さんは実は今年の8月にお亡くなりになりました。95歳の誕生日の目前でした。宮良さんは資料館の開館の前からたかさんの方たちに自分の体験を語り伝えてきました。沖縄県内だけでなく県外にも出掛けて行って、精力的に伝える活動をしてきたんです。この映像は宮良さんの遺言、次世代への遺言じゃないかと私は思います。今日皆さんに見ていただく機会をつくって本当によかったと思いました。

11月になって資料館の、コロナが少しずつ落ち着いてきたので、やっと資料館にも来館者の皆さんがいらっしゃるようになりました。少しずつではありますけれど、いらっしゃるようになりました。これからこの大事な資料館をなくしてはならないと、皆さんも思ってくださいているし、私たちも思っています。ぜひこれからまた、たかさんの皆さんに来ていただきたいと思っています。皆さんも、もし沖縄にいらっしゃる機会がありましたら、ぜひひめゆり資料館にお立ちください。

今日はお話をする機会を与えてくださりまして、ありがとうございます。

### ○司会

普天間館長、ありがとうございます。沖縄が大きな痛みの中で、今つないでいこうとしている思い、ぜひひめゆりでも見ていただきたいと思います。

さて、それではここで5分間の休憩の時間を取らせていただきます。短い時間で申し訳ありませんが、5分間の休憩です。その後、第2部パネルディスカッション。普天間館長、そこでも一緒にいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

トイレタイムということにもなります。お手洗いは6階のロビーフロアになりますので、1階下になります。このホールは7階です。6階ロビーフロアまでご移動くださいませ。

## 4. 第2部 パネルディスカッション

### ○司会

短い時間で少し急がせてしまいました。申し訳ありません。

それでは、これより「御万人(うまんちゅ)びーすふるアクション」びーすふるシンポジウム」の第2部、パネルディスカッションです。

コーディネーターは私、佐渡山が務めさせていただきます。

まず、先ほどご講演をいただきましたお二方にもこのメンバーに加わっていただきます。本日の特別講演から引き続き、ベシャワール会、村上優(むらかみ・まさる)会長です。お願いいたします。

そして、この御万人びーすふるアクション代表として今日は出演してもらいます。

次の時代を担う若い世代の一人として活動しています、びーすふるメッセンジャーの仲本和(なかもと・わたる)さん、お願いします。平和活動に携わる若者の立場からいるいると思うところがあります。ご意見いただきましょう。

そして招待講演から、ひめゆり平和祈念資料館館長の普天間朝佳(ふてんま・ちょうけい)さん、引き続きお願いいたします。

そして今日はリモートでの出演となりました、沖縄国際大学法学部准教授、野添文彬(のぞえ・ふみあき)さん。ちゃんと画像、こちらの声も届いていますでしょうか。

○野添 はい、よろしく願いいたします。

○司会 よろしく願いいたします。

沖縄国際大学では、国際政治学、日本外交史などを中心に教鞭を執られ、その一環として平和学習を授業にも取り入れていらっしゃいます。本日は教育現場からのご意見も伺っていきます。

そして、もう一人、若者の代表として、御万人びーすふるアクション事務局から、狩俣日姫(かりまた・ひつぎ)さん。ニッキーでよかったですかね。はい、よろしく願いいたします。

皆さん、このシンポジウムが始まる前に、実はこのびーすふるアクションの取り組みをご覧いただきました。その中でワークショップ。沖縄県内にとどまらず、県外でも多くの場所で沖縄からの平和のメッセージを届ける。先ほど平和祈念資料館の伝え方も変えているという話がありましたが、そのような取り組みの中でコーディネーターとしていろいろと活動していますが、メインはファシリテーター。このファシリテーターという言葉も後でちょっとお願いしたいと思います。以上、世代も立場も違う5名の方々にパネリストを務めていただきます。

それから、ここで皆さまにもお伝えしておきましょう。後ほど会場の皆さまからのご質問もお受けしたいと思っております。パネルディスカッションの間に、いろいろ皆さんのご意見、質問、思うところがあると思います。お手元の質問カードにご記入いただきたいと思っております。お手元にありますかね。大丈夫でしょうか。手を挙げていただければ、こちらにいるスタッフが受け取りにあげりますので、合図を送っていただければ、こちらで預かりすることができます。

また、オンラインで参加なさっている皆さま、よろしく願いいたします。画面の下の方をご覧くださいませ。ここにQ&Aのボタンがあります。そこをクリックすると質問を入力することが可能ですので、この会場のみならず、オンラインでもご質問、ご意見などをいただいきたいと思っております。

なお、実はこれだけの皆さんがそろっていらっしゃる中ではありますが、パネルディスカッションの時間は限られておりますので、時間に限りがあります。お預かりした質問にお答えできない部分もあるかと思いますが、ご了承いただきたいと思っております。今後の活動に、県の活動にも反映させていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。



さあ、それでは早速ですが、皆さんの声をいただきたいと思います。まず今回のこのシンポジウムパネルディスカッション、細かくいろいろ伺いたいところではあるんですが、まずそれぞれのお立場でどのような活動をして、その上で平和についてどのように考えていらっしゃるのか伺っていききたいと思います。先ほどお話をいただいた、ご講演いただいた方以外から先に伺っていききたいと思います。

まず、若者を代表してということで、先ほどご紹介をしました、沖縄国際大学4年次ですね、仲本和さん、メッセージとして今日は出演していただいています。ご用意はよろしいですか。

○仲本

沖縄国際大学4年の仲本和といいます。今は21歳で、最年少として今日は出させていただきますけど、自分が取り組んでいるものとしては、沖縄県外の中学生、高校生を対象に、沖縄戦だったり米軍基地についての勉強会だったり、ディスカッションをメインとした学習会を行っていて、その中で体験していない自分が沖縄戦を語るということへの悩みだったり葛藤がある中、でも体験者というものはもう10%も切って、いなくなるというのが分かっている状況で、次は体験していない世代が語るとなったときに、若い世代に誰が語るのか。となったときに、自分たち同世代が働き掛けることに意味があるのかなと思ひ、大学に入ってから4年間取り組んでいるかたちです。

「平和とは」にも答えていいんですか。

○司会 いいですよ。

今日は話したいことをたっぷり話していただきたいと思っているんですが、仲本和さんの名前なんですけれど、楽屋でもちょっと話していたんですが、平和の和と書いてワタルという名前、和さん、この名前、どう受け止めていますか。

○仲本

親からもそういうふうに言われた記憶はあまりないんですけど、自分の方では勝手に平和の和として意味付けている部分はあります。

○司会

和さん、ちょうど今コロナ禍ということの表現のかたちとしても大きな意味があると思うんですが、先ほどリモートの取り組みも、活動もあると話していたんですが、ちなみにリモートの対象となっているのはどういう方々ですか。

○仲本

リモートも、やっぱり県外の学生をメインに、高校生がほとんどにはなるんですけど、45分の2コマをいただいたりリモートで取り組んでいる。リモートのデメリットというのたくさんあるんですけど、メリットとしては、画像だったり映像というのを同時に扱って、沖縄でフィールドワークをするという平和学習会だと、自分の語りでしか伝えられない。ですけどリモートだと、そのときの映像だったり資料というのが間に挟み込めるというメリットがあって、有効的にできているのかなとは思っています。

○司会

コロナ禍になる前はどのような活動だったんですか。

○仲本

コロナ禍になる前は、実際に沖縄県内で受け入れて、沖縄国際大学が宜野湾市の普天間基地の真横にあるところなので、そこからの普天間基地を眺めて、実際にオスプレイが飛ぶのを見たり、自分たちがガイドしている中、その騒音で本当にガイドがストップしちゃうというのもリアルに感じてもらいながら、また普天間基地の隣にある嘉数公園というところをメインに、嘉数での戦場、住民の巻き込まれた話などを行っています。

○司会

その今伝えている内容なんですが、仲本さんは沖縄戦について、基地の問題について、どういうふうに学んできたんでしょう。

○仲本

沖縄県では、この6月23日の慰霊の日をメインに平和学習、平和教育というのが毎年行われていて、小学校1年生から高校3年生までの12年間、平和学習というのをやる機会があって。その中で小学校、中学校は体験者の方から話を聞く機会があって、より戦争をリアルに感じられることができて。けど、今度高校生になったときに、非体験者の方から沖縄戦について聞く機会があって、そのときに自分の中で、非体験者の方からの話というのは全然自分の中に落とし込むことができなくて、というのを高校生のときに感じて、若い世代に誰が今後語るのかとなったときに、近い世代が重要なのかなというのを高校生のときに感じて、大学生でそれに取り組んでいて。

沖縄県での平和学習というのは、自分が受けてきたものとしては、体験者の沖縄戦時中の被害の話であって、それまでの前後関係というのは正直、大学に入ってからしか自分にはつかむことができなかったの、被害の継承がメインに行われているのが現状で。

ただ、その被害の継承の目的としては、また同じような戦争での被害を出さないようにという部分があると思うんですけど、でも被害の話だけを聞いても、何で戦争が起きたかというのを知らない限り、被害者にならないために戦争を起こさない、巻き込まれない、でも起こす方の戦前の話というのが抜け落ちている状況で、被害者にならないための手段、方法というのは、正直、今の被害の継承がメインの平和教育では学べないというふうには個人的に感じていて。

自分の中で思う平和教育の課題は、戦前、国民、今被害者として語っている方々だったり、これまで語られてきた方々が何で被害者になってしまったのか。昨日ゆめゆめの展示にもあったように、軍国少女をつかってしまったという部分、ああいった教育だったり、メディア、当時の社会というのが国民を戦争に向かわせてしまう、肯定的に捉えていたということを学ばない限り、戦争を繰り返さない、被害者にならないというのは結びつかないのかなというふうに考えています。

○司会

話を聞いていても、たぶん今も葛藤しながら、いろいろ模索しながら活動を続けているんだと感じました。ただ、同世代でやっぱり自分がやらなければと、知らなければいけない、学ばなければいけないから、一歩踏み込んで自分が伝える側に立っているということがとても印象に強くあります。また後で話を聞かせてくださいね。

そして、同じ沖縄国際大学、これは図らずもなんですけど、野添先生。

○野添

野添です。よろしく申し上げます。

○司会

よろしくお願ひいたします。今、仲本さんの話を聞いて、どのように受け止めたか。

○野添

同じ沖縄国際大学の教員としては非常に、私が教えているわけではないんですけど、誇らしく思いました。

最近の学生の傾向として思うのは、やはり平和などについて勉強するときに、一つは非常にさめてしまっているということがあると思います。なかなか感情移入しづらいところですね。

もう一つは、他方で先に答えが分かっちゃってしまうようなことを言うてしまう。平和講習、平和学習などで勉強してきたことを、あまり考えないで答えてしまう。

そういうふうな殻を、私も今国際政治学などを教えながら破っていきなというところは日々考えていて、そこは仲本さんのおっしゃることと非常に近いなということを感じました。





○司会

その中で、先生のご専門として国際政治学、そして日本外交史などに取り組んでいらっしゃるということですが、沖縄から発信していく平和のメッセージについてはどのようにお考えですか。

○野添

私は沖縄国際大学で国際政治学を勉強しているんですけど、まさに沖縄で平和であったり国際政治を勉強することは非常に意義があるというふうに考えています。

沖縄ほど国際政治の荒波の中で翻弄されてきたところもなかなかないわけですし、沖縄国際大学、今まさに米軍基地の横で勉強しているということもあります。だからこそ平和の尊さであるとか、あるいは国際政治の厳しさ、いかに平和を発信していくかということを訴える上で非常に大事な場所だというふうに感じています。

○司会

そうですね。立地からしてもそうですね、学校のキャンパスにヘリが落ちたという事件もあったところですので、あらためて考える拠点として、とても意味があると思います。野添先生、もう少しいいですか。

○野添 はい。

○司会 実際に野添先生は滋賀県の生まれで、沖縄のご出身じゃないですね。

○野添 はい、そうですね。

○司会

その県内、県外の沖縄戦について、それから平和についての考え方、その角度の違いというのは何かお感じの部分はありますでしょうか。

○野添

滋賀県でももちろん平和学習のようなものは私も勉強してきたわけですけど、沖縄と大きな違いがあるというのは、沖縄戦、それから沖縄の戦後の米軍統治、それから基地というかたちで、今まさに直結している歴史がそこにあるということですね。

今でも米軍基地の問題、あるいは米中対立などといったきな臭い問題、こういうところでも直面して、そういうリアルな環境の中で歴史のことを勉強し、そして歴史のことを勉強することが現在につながっていく。歴史というのは過去と現在の対話であるということをよく言いますが、それをまさに沖縄での平和学習というのは体現しているように私は思っています。

○司会

ありがとうございます。

そのようなこともあって、今日私たちも東京まで出向いてきているわけですけど、立場が違う、そして見えている角度が違う中から、よりよい答えを導いていけたらと思います。また後ほどよろしくお願いたします。

さあ、そしてもうお一人、パネリストとして今日は、普段はスタッフのお一人なんですけど、狩俣日姫さん。日姫さんは沖縄宜野湾の出身でしたね。

○狩俣 はい、そうです。

○司会

今回このびーすふるアクション事業、特に全面的にワークショップなどにも取り組んでいるのを聞いていますが、今日映像でも出ていた「ニッキーと呼んでください」というような、入り口でスタートする平和学習、特に心掛けていることはどのようなことなんでしょう。

○狩俣

最初に、私の肩書というのが平和教育ファシリテーターとなっていて、そちらのファシリテーターとは何だということからお話しさせていただきたいんですけど。

ファシリテーターというのが、そもそも「ファシリテート」という英語で「促進する」という意味ですけど、そういったかたちで例えば会議の場だったり、何か意見が出てくる場で合意形成をしなければいけない、何か決めなければいけないというときに、そういったかたちで会議を促進するだったり、会議のかじ取りをして、みんなが納得する方向に話し合いを持っていくというようなファシリテーターという役割がありまして。

それで、そのファシリテーターというものが、特に私は教育面に対して、今ですとアクティブラーニングだったり、生徒だったり子どもたちが、今までだったら話を聞いて、そのインプットがメインだった学校の教育ということから、もっと自分たちの意見が出てくるような主体的な生徒を育てようというところで、このファシリテーターという役割が先生方にもファシリテータースキルというものが求められていくというところですけど、それが私はすごく平和教育と相性がいいなと思っていて。

何でかという、やっぱり私も平和学習をずっと子どものときから受けていて、沖縄戦のことを学ぶというところから、じゃあ、沖縄戦が悲惨であったりとか、平和が大切、戦争が嫌だということでは分かる。分かるんだけど、じゃあ、そこからは自分たちが平和をつくるために何をしたらいいのかというのが分からないという、ずっとそれを持っていて。

実際にそれは去年の、この事業は3年目なんですけど、2年目のときに生徒に「あの、ニッキー、あのさ」というかたちで授業が終わった後に、「平和のためにどうしたらいいんですか」ということを言われてしまって、そのときに私自身もずっと、「じゃあ平和のためにこうしてください」と言うのって、すごく戦前の教育に近いなと思っていて。「こういうことをしたら、こういうふうになる。だからそれをやってください」ではなくて、さっきも特別講演のときに中村哲医師の言葉であったように、自分たちで自立していくというようなところの自分たちの考えを持っていく。どうやったら平和のために平和構築を主体的にできるかというところを考えたい。

ただ、それに対して、ずっともやもやしてほしいなという気持ちもあって、そこは何かをやってくださいだったりとか、何か意見を押しつけるというようなことはしていませんけど、「実際に、じゃあどうしたらいいの。いや、べつに戦争、嫌だよ、自分だって」というようなことを言われて、「じゃあ、一人で何かできることがあるんですか」というところを言われたときに、すごくギクッと思って。

それで、ああ、どうしようかな、どうしようかなと思った結果、じゃあ、何かを教えてくださいとは言わない。だけど、じゃあ、そういうふうにならぬ社会、平和に根ざしている社会なのかであったり、または戦前のような社会の流れになっていないかという、自分たちの社会を見る。

そこからじゃあ、その後これから先どうしていくか。今自分たちがどういう状況であるかだったり、これからどうしたいかということを考えるためには、やっぱり過去のことを学ばなければいけないよねというようなところで、この沖縄戦を学ぶということと、じゃあ、何で沖縄戦がここまで継承されてきたか。76年間ずっと残ってきたかというようなところの、体験者の方だったり、沖縄戦を残してきた人たちがどういう思いがあったか、どう努力があったかというところを想像してもらおうということと。

じゃあ、ここから自分たちが今生きている社会ってどうなんだろうねということと、プロパガンダ的な、戦争の戦前の社会がどうなっているって軍国少女が生まれたかというような、先ほど仲本和君が言っていたようなことを実際に体感してもらったりとか、あるいはそれを考えるために「戦争をつくる」というようなかたちで、じゃあ、どういうメディアで、どういう映画をつくったり、どういう情報を流せば戦争を国民が納得するかどうかということを考えるというような授業をしています。

#### ○司会

伝えたいことがきつとたくさんあるんだと思うんですけど、その中で伝え方というのも問われているんじゃないかなと思います。

先ほどから、どうしてもひめゆりの話を中心に出ていますので、少女たち、それから元学徒隊もありますので、少年たちが戦争に駆り出されてしまった時代、それがどれだけ悲しいことで、つらいことで、あってはいけないことだったのか。頭では分かりながら、どう考えていくのか。

先ほどご講演の中で村上さんにもお話しいただいたんですが、村上さん、今伝えていくということにみんな苦勞しながら、悩みながら、でも実際に活動している。この内容を聞いてどのように感じていらっしゃいますか、

#### ○村上

中村哲は、平和は「抽象」ではなくて「実際」なんだと。それから行動なんだというようなことを言っていました。だから、抽象的のものを考えるよりは、目の前にいたい自分たちに何ができるかというのは、沖縄の方は沖縄の目の前にある「実際」があり、私たちはアフガニスタンでの「実際」があり、それぞれの場で「実際」があるんだと思います。

そこにいかに、それは困っている人がいれば、おばあさんの手を引いていくことだって「平和」なんですね。ですから、実際に何ができるかというのは、抽象的のものを、平和を考えるんじゃないくて、実際にものを考えていけば、それがやっぱり平和につながるんだらうなと私は思いました。ですから、皆さんたちが沖縄におられるというその現実を受け入れていけば、その場で実際の行動をしていくということではないでしょうか。

実は中村哲医師は、第1回の沖縄平和賞をいただいて、その講演がございました。実は私は1975年に県立八重山病院で精神科の医師として1年間働きましたし、加えて2006年から8年間、国立病院機構の琉球病院というところでまた8年間働かせていただいて、沖縄には私自身もかなりの縁がございまして、そういう意味では、沖縄というところにいけば、やはりひしひしと、平和は抽象ではなくて、具体的だと。行動なんだというふうには思えるような現実を感じておりました。

#### ○司会

ありがとうございます。

そうですね。そこにあった事実、現実を私たちがどれくらい理解できるのか。いろいろとシンポジウムパネルディスカッションの話をしている中で、先ほど村上さんが言ってくださったキーワードとして「共感」、そして「想像力」ということを話していただいたのがとても印象に残っていますけれども。

抽象的な概念であるとか、あるべき論というようなものではない中で、私たちにできること、その中の一つに、先ほど普天間さんも伝え方の変化をご講演いただいたんですが、普天間さん、例えば今言った「事実」ですね。そして「共感」、そこからどう想像してもらうかといったときに、リニューアルはきつとずいぶん悩まれたんじゃないかなと思うんです。「よかった」という声で私たちも理解できるところがあるんですが、逆に変えることの怖さというものもお持ちだったのではないのでしょうか。

#### ○普天間

そうですね。やっぱり体験者たちがつくってきた展示を私たちが壊していいのかというのは本当に思いました。それでとても心配している職員たちもいたんですけど、でも、そういう声はあっても、今、仲本さんとか狩俣さんから話があったように、一つの例なんですけれど、実はちょっと前から体験者の講話をやるときに、中学生、高校生たち、仲本さんの話にもあったんですけど、子どもたち、生徒たちは、聞いてはいるんですけど、おそらく、こういう言い方、原液過ぎて飲み込めないというんですか。受け止めきれない。大事な話をしているとは分かるけれども、いったい何の話なのか受け止めきれないんじゃないかなと感じたりすることもあったんです。

展示も同じように、やはり世代が変わって新しくなっていくと、次の世代に橋渡しをする役割が必要になってくるんじゃないかと思っているんですね。だから私たちの役割はそれじゃないかなと思って、展示も。展示を今回リニューアルしたのは、先ほどもお話ししましたが、戦後生まれの非体験者が中心になって取り組んだんですけど、それは非体験者ならではの視点とかアイデアだったり、こうすれば今の世代にも伝わるんだらうなという視点からだったと思う。その視点は必要だったと思うんですね。

でもやっぱり体験者の証言はとても大事。先ほど宮良さんの証言を見ていただいたんですけど、でも、おそらく体験者の証言は、1時間とか1時間半の長い話の中で、何の話をしているのか分からなくなってしまったり、「熱い思いは伝わってくるけど」というのがあるのを、私たちは平和講話というときには、今の宮良さんのものは2分半だったんですけど、15分くらいの映像とともに、前後でいろいろ話をしたりしているんです。学校生活の話だったり、さっきの戦後の思い、どう思うかといったのかとか。

宮良さん一人の体験者を中心にやっているんですけど、映像もそういう字幕を入れたり。私たちが大事だと思う、1時間とか1時間半の長い話じゃなくて、やっぱりこの体験者の長い映像は今の若い世代は見ないというので、それをうまくしっかり伝えるところを編集して届ける。そういう工夫が必要になってくるんじゃないかなと思うんですね。それこそ私たちの役割だと思っています。

#### ○司会

そうですね。たぶんこれは両論あるんじゃないかと思いつつ聞いていたんですが、資料館の展示を見て「怖くなかった」という言葉の受け止め方だと思つたんですね。私は普天間さんと同世代なんですけれども、実際に平和祈念資料館、沖縄県の資料館に足を踏み入れたときに、怖すぎて二度と行けない気分になったことは確かにありました。でも、その怖さがまた残ったということにも意味があるのかと思つた世代なんです。もちろん戦後といっても今76年ですから、76歳以下の方はみんな戦後生まれという時代に来ているわけです。その中で私たちがどう伝えていくのか。

先ほど日垣さん、館長の話聞きながら大きくなつていきましたけれども。

#### ○狩俣

やっぱり伝わらないというところだったり、私自身も、沖縄戦ってどこまで伝えれば沖縄戦を知ったことになるんだらうかというところを、すごくワークショップの2時間の短い時間の中で、沖縄戦の知識だったり、概要だったり、体験者の感情とかがどうやったら伝わるんだらうと思って、すごくぐるぐるしたんですけど、その結果、「伝わらない」ということを伝えてしまおうと思つて。

それで、私の沖縄戦のこのびーすふるアクションは2時間、だいたい2コマいただけるんですけど、そのうちの前半1コマ目で沖縄戦の概要だったり、体験者の方のお話をみんなに講義するというかたち。2コマ目は、まったく沖縄戦ではなくて、これから平和構築をするためにどうしたらいいかというかたちで前半と後半に分けていて。本当にこれはたぶん2時間丸々ぎゅぎゅっと沖縄戦のことをお話しした方が、きつと沖縄戦の知識は皆さんに伝わると思うんですけど、そうじゃなくて、それは「伝わらない」、「2時間で知った気になってもらっても困る」というところで、2時間、たったこれだけの授業で沖縄戦のことを知った気にならないでくださいというかたちで最後を終わらせるようにしたんです。

その中で、沖縄戦の知識というか、記録というところでも、どういった、何月何日にどこから上陸して、どういふふうには始まったのかという概要的なところと、体験者一人一人が体験している沖縄戦というものがまったく違う。だからこそ、20万人が亡くなった一つの大きな戦争というふうには沖縄戦は捉えられると思うんですけど、その中の20万人の一人一人の亡くなり方だったり、生き残った方たちの体験というのがまったく違う。

だからこそ、20万人が亡くなった一つの戦争というところと、一人一人が亡くなった20万件分の殺人事件というかたちの、この二つの捉え方を学んでもらって、そこから、もしかしたら自分たちの地域、学校ごとにある、例えば宜野湾市の学校だったら、宜野湾市はどういう戦争があったんだらう、どういふ人たちがいて、どういふふうな亡くなり方をこの人たちはしてしまったんだらうというふうな、いろいろなきっかけ、種だけを植えて、2時間では沖縄戦のことは知れないので、これからも学び続けてくださいというふうなかたちで私は伝えていきます。

#### ○司会

そうですね。私自身も同じ感覚があるんです。

戦争について伝える側に回ったときの怖さってありますよね。私自身もまだ知らない。もっともっと知らなければいけないが、でも、それを言っているとなんか動けなくなってしまうということも実感としてあります。知らないことを知ったところから、知る努力をして。これは先ほどの村上さんの話ともつながっているような気がするんです。事実を知ることは簡単なことではなく、これもどうすればいいかと思うんですが。



○村上

事実というのは、誰から見た事実かという主体の方があります。ただ、やはり事実というのは事実なんです。事実というのがいかに多くを物語るかというのは、受け取る側の人間の問題もあります。ですが、その受け取る側の問題の前の「事実」が伝わらなかったら、どう受け取りようもない。だからやはり、しっかりと事実を伝えていくというのはすごく大事な事だと思います。

先ほどのひめゆり学徒の、小学生からずっといるというあれは、見たあれ、その人たちが亡くなっていくというのが事実ですね。亡くなり方のいろいろなプロセスのディテールのところを聞かなくても、この人たちが亡くなっていったという事実はわれわれのスタートになります。だから、こういう伝え方がやはり次の想像力をつくっていくんだと思います。この人たちが亡くなった悲しさが、ほかのところで起こったときにどんなふうになるんだろうかという「共感」が出てくるわけですね。そして、そこから「想像」が出てくるんですね。それが私にとっての一つの事実になっていくと思います。

先ほどアフガニスタンで今、非常に多くの人が亡くなるようにしている。この冬を越せるかどうか分からない。一人二人じゃなくて、非常に多い数だと。これは私が言っているだけじゃなくて、多くの現場を知っている人間が言っています。そこは事実です。そのことを言葉で伝えたときに、その言葉を聞かれた皆さんたちがどんなふうに関心するのかわからない。「これは大変なことだ」と思う方もいれば、「あ、そうですか」という方もいるんだと思います。だから、ここを養っていかないと。

共感して、そこからこのことがどんなふうになるかということ想像する、そういう力が生まれてくるかということ期待しながら、だけどわれわれが伝えられるのは、やはり事実です。事実だけです。だから、しっかりとその事実を伝えていただくことが私は大事な事なんです。

私自身が、中村哲が知った事実を聞いて、共感して、そして私自身も中村哲さんの手伝いをしようと思ったわけだけど、そうじゃない人もいっぱいいるわけですね。ですからそれは、出来事に、事実に出合うことは、みんないるんなかたちで出合っていた後のことというのは、どうつかんだかという

のは、これは「私」の問題ですね。こういう構造の中で、ものが広がっていかないと。いいなと思いました。

○司会

私が伺ったプロフィールの中に、「山に登らないか」という一言が入り口だったというふうに向っているんですけど、村上先生とベシヤワール会の入り口ですね。伝わり方、始まり。中村先生との出会い、それが全ての始まりということになるんでしょうか。

○村上

山登りは一つの、もうなくなった経過なんです。僕は一緒に、彼が1978年にテリチミールという7800メートル近くの山へ登りに行って、その登山隊付きの医師で行ったわけです。翌年の79年に一緒にトレッキングに行きました。その79年というのはソ連が攻めてきたときで、山の方を越えてアフガニスタンに入ろうと思ったけれども、それはできませんでした。そのことで。

山の中に閉じ込められたときに、やっぱり命の問題について彼と議論をする機会が、やる事がほかにもないものから、お互い医者ですので、自分の死生観を含めているなことを話し合いました。それはすごく共感的だったし、僕にとっては大きなインパクトになったと思います。だから、そのときに彼の大きさを知ったときに、あ、この人というのは、年齢はそんなに離れていないけれども、すごく大きな人だという、そこでの私自身の彼に対する思いが出てきたという経緯がございました。

○司会

ありがとうございます。この出会いから始まったこと。ご講演の中にもあったように、命に対する思いの強さ。人間だけではなくて、全ての自然の営みに対する思いというの先ほどのお話から伝わってまいりました。

さあ、それでは、平和についてももっと深くお話を伺いたいところですが、先ほどの中村さんの、中村哲さんの言葉を借りると、人々が安心して暮らせる状況を平和だというふうに定義していたように覚えていて。それぞれが平和を目指して、どの言葉を大事にして今活動しているかということはあるんですが、そこから先にちょっと進んでいきたいなと思います。



戦後76年、私たちは戦後という言葉はずっと使っています。このシンポジウムではこれまでも、「戦前」にしないためにはどうすればいいのか、この時代が「戦前」というふうには呼ばれないようにするために、どうすればいいのかということが大きなテーマの一つ。そのために何をどうつなげていくのかということがあるんですが、仲本さん、どうでしょう、そのことについては。

○仲本

何度考えても難しいものなんですけど、でも結局こういうテーマを持って議論し続けることが重要だと思いますし、こういった多世代、いろんな世代だったり、いろんなポジションからの人たちがこういった議論を繰り返すことで、戦前にしないためという方向に進むこともできると思います。

ただ、このちょっと沖繩のことと絡めて話すとすれば、沖繩戦を風化させない、戦後76年という言葉は、余計戦争から遠ざかってしまうと思って。戦後76年、戦後80年とどンドン経っていくと、どンドン自分たちから遠い話になりかねない。沖繩戦を風化させないという言葉が、より76年前の沖繩戦にこだわり続けてしまっていて、今が戦前なのかというのが分かりづらくなるんじゃないかと思って。だから、戦後76年というキーワードだったり、沖繩戦を風化させないというのあまり自分はこだわり過ぎない方が、今の社会を見つめる、今が戦前なのか、戦後なのかというのを考える上では大事なのかなと思っています。

○司会

歴史をしっかりと認識して知ることが重要だけれども、今をまずちゃんと見なければいけないというのは確かだと思います。

普天間さん、先ほど新しい展示のテーマは、今仲本さんが言った言葉と重なりました。「戦争からさらに遠くなった世代へ」というテーマでくくられていますね。どうでしょうか。

○普天間

今、仲本さんが話していたんですけど、確かに野添先生も言っていたように、今、国際情勢とかいろんな問題がある中で、いろんな今の問題を考えないといけない。アフガニスタンの報告もありました。今の問題を考えないといけないとは絶対思います。それはいくつかの場面でみんなが考えないといけないことだと思うんですけど、私は、やっぱり戦争を76年もしなかったいくつかの要因があると思うんです。

一緒にアメリカ軍の支援をしりたしことはあると思うんですけど、それは戦争体験者がずっと「戦争は絶対駄目だ」と言い続けたことが絶対に響いて、伝わっていると思うんですね。資料館に2千何百万人の人が来て、やっぱり戦争は駄目だと思う気持ちになったと思うんです。それは今の問題を考えると同時に、ずっと言い続けたいいけないことだと思います。それをしっかりとこれからもやっていかないといいんじゃないかと思うんです。

あの島袋淑子前館長がよく生徒たちに言っていたのは、「戦争が始まったら、どんな人でも止めることはできないよ。本当にみんな戦争の歯車になってしまう。だから皆さんは、戦争の兆しを少しでも感じたら、反対の声を上げて、反対する行動をしてほしい」というのは中学生、高校生たちに伝えていたんです。今の問題を考えると同時に、しっかりとそういう戦争体験者が心に刻んでいたことを私たちはしっかりと伝えたいいけない。

今の国の政治を動かしている人たちも戦争体験のない世代がたぶん増えていると思うんですね。そこから発想するものと、戦争体験者が元氣だったころの発想は違うと思うので、私たちも戦争体験を知らないんですけど、そういう気持ちを本当に広げないといけないというのは、私の一つの使命でもなと思っています。

○司会

そうですね。戦前の話を聞くと、どうしても発言の機会がそれぞれに権利としてない。指示されたことに動かなければいけない。意思も持たせてもらえない時代があったということを考えれば、今の話を言い続けていくこと、そして自ら考えること。確かにそうだと思います。野添先生、どうでしょう。

### ○野添

私もまったくおっしゃられたことに同意するんですけども。最近、日本とアメリカが戦争した原因とか経緯とかについても歴史研究がどんどん進んでいるわけですけども、それによれば、日本政府の中でも、アメリカと戦争するべきではないとか、日本とアメリカが戦争したら、物流などの面でアメリカに勝てるわけなどないんだというのは理解されているながらも、誰もそれに反対できなかった。2年とか3年ぐらいなら戦えるとか、そういうことを言って、実際に負けるということをはっきり言う人がいなかったということが、ずるずると。誰かが戦争をするぞと言って戦争に入ってしまったのではなくて、むしろ日本はずるずる戦争に入ってしまったということが明らかになっています。そういうことから考えると、やはり一人一人の人間が社会の中であったり、あるいは組織の中で自分の意見をはっきり言えるような、そういう自立した人間というものを構築していくということが一つ、平和を構築する上での非常に大事なことになるのではないかなと考えています。

### ○司会

ありがとうございます。やはり自ら考える。ディスカッション、こういう機会をどれぐらい私たちが持っているのかということも考えていきたいと思っています。ご質問カードがそろそろ届いておりますが、必要な方、もし持っていらっしゃる方がいれば合図を送っていただきたいと思っています。よろしく願います。狩俣さん、どうですか。今、皆さんの話の中で、やはり私たちが平和をきちんと守る。守るとい言葉もちょっと使いづらんですけど、平和な社会をきちんと継続していくために、そして戦争に向かわないために。

### ○狩俣

やっぱり私自身も、こういうふうには「戦争が何で起きるかということを知らないと止められないよね」というような平和学習のかたちというのは、もともとずっとあったと思うんですけど、最近から学校現場でも主流になってきたのかなと思ってきていて。それってというのは、ここまで戦後76年、76年間戦争をしなかったというところが何でなのかということ。じゃあ、それに対して今、同じように私たちは76年延ばせるのかということ。それって結局何だろうと思ったときに、やっぱり「人」なのかなと思っていて。

私たちは直接体験してはいないんだけど、じゃあ、体験者の方たちと同じくらい平和に対して声を上げるだったり、76年また先に延ばすというところをどうしようかというのを考えていった結果、戦後を戦前にしないためにどうしたらいいか。じゃあ、そのために戦前というものがあったか学ぼうというふうになったと思うんですけど、その大前提にあるのは、戦争をしちゃいけないということ。

本当にストレートな、本当に当たり前のこと。戦争をして国と国というところの構造的なものによって一人の個人の命が奪われるということがあってはいけないということ。それをずっと76年間、体験者の方々が伝えてくれたので、それをまずは受け止めて、そこができてからじゃないと、やっぱりここから先の話はできないと思うので、そこを一緒に学んでいくのと同時に、平和ということも一緒に考えていくところをこれからも。体験者の方がいなくなったときに、体験証言だったり体験者の方のエピソードとか、言葉というのがすごく軽くなってしまうんじゃないかという危険性もあって、やっぱり戦前に注目しようという今の平和学習の流れもあるので、それも同時に、その危機感ということも一緒に考えながら、体験者の方たちが残してくれたものについて注目して、そこからその先でまた一緒に考えよう、ということができればいいなと思います。

### ○司会

ありがとうございます。そうですね。歴史、そして証言、思いをつなぎながら、でも今のこの時代、社会の動きに私たちはどれくらい敏感に情報をキャッチしているのか。それから、きちんとした「自由」というかたちの表現が守られているのかどうか。情報が確かな情報として私たちの手に届いているのかどうか。このあたりも政治や社会の状態を見ながら、きちんと見極めていかねばいけないんじゃないかなと、そんなふうにも思っています。

さて、皆さんからの質問カードが届いております。ペシャワール会の村上さんへということでもいただいております。お願いしますね。「この冬を越せない人が数百万人に上るという状況にあるという話がありました。ペシャワール会としてどのような取り組みをしているのでしょうか。また、日本社会への訴えがあればお願いします」と。

### ○村上

私たちにできることと、できないことがあります。私たちはナンガルハル州というところで事業をして、私たちにできることというのは、その人たちの今の農業用水路をつくらうということを支えることだけです。日本がというふうなお話がありましたが、今あのアフガニスタンの状況というのは、単なる虚構の上の、それをつくったのはマスコミかもしれないし、そういう政治的な流れがあったのかもしれないけれども、虚構の上に虚構を乗けたアフガン像です。タリバンも人間です。いいところあれば、悪いところもある。いいところもあれば悪いところもあるという人たちと一緒にやれるかどうかなんです。平和ということは、戦わずに、いい人、悪い人、争いはあるけれども一緒にやれるかどうかということなんです。そういう視点で、もう一回このアフガニスタンの状況を見ていただきたい。99%が今はそうじゃないと思います。1%の人は私たちと共感できているかもしれない。それを1割でも2割でもいいから広げていきたい。だから事実を知っていただきたい。そういう思いです。われわれ、実際にたくさんの方が亡くなったときに、それを座して見るしかないというこの悔しさはやはり残ってくるだろうと思います。

### ○司会

ちょっと関連するカードが今来ましたので、続けて村上さんをお願いしたいんですが、「中村医師もおっしゃっていましたが、不戦であることが一番大切なのではないと思います。非戦であるとか不戦、戦わないということですね。憲法9条についてどう思われますか」ということまでお話があります。

### ○村上

不戦、非戦、これは、人が人を殺し合うという場面を実際に知っている人でない限りは、このことは非常に抽象的かもしれないけれども、これは具体的なことなんです。先ほどの話で、平和は具体的なことだと思います。当然、憲法9条に関しては、これは日本の文化です。やっとな大きな犠牲の上に立った文化です。これを守りましょう。

### ○司会

はい、ありがとうございます。仲本さんへの質問ですね。「平和に関する活動をしているほかの地域、それから国の若者との連携、議論の機会はあるのでしょうか」。同世代ね。どうでしょうか。

### ○仲本

今年、コロナになって、この1、2年で県外の大学生とつながる機会というのは何倍にも増えていて、その中で沖繩、広島、長崎というのは、やはり平和教育が充実している地域になっていて。ただ、どの県も自分たちの、沖繩においては沖繩戦、長崎、広島においては核での被害ということをメインに平和教育が行われていて、ただ、それを毎年学んでいると、やっぱりマンネリ化しちゃうというのが現状で。となったときに、ほかの地域の戦争というのを知ること、また自分たちが継承しなければいけない沖繩戦についてのヒントだったり、また新たな平和の考え方というのが生み出せるんじゃないかということ、今この3県の同世代とお互いの戦争を学び合うというのをこれからの世代に向けて取り組もうということをやっているのと。あと、平和教育というのは、大前提として戦争をもう繰り返さないというのがあると思うんですけど、けど、この沖繩、広島、長崎の3県だけで充実したところで戦争に向かわないということにはつながらないと思っていて。となったときに、いかにこの3県がほかの地域、県外を巻き込めるかだと思っているので、という意味では、やっぱり体験してないけど、自分たちにも使命があると思っていて、これが自分の考える戦後世代の責任でもあると思っています。

### ○司会

ありがとうございます。ここにすぐやっぱり私も期待したいなと思っているところなんです、一人のひととの出会いが次の活動の展開につながっている。これは狩俣さんから先ほど確か話が打ち合わせの際にありましたね。この人との連携、ネットワーク、どうでしょう。

### ○狩俣

私も県外の方と交流する機会というところで言うと、去年ちょうど沖縄と広島と長崎の20代で平和学習の活動をされている方たちとYouTubeで配信するということを見せていただいて、それで、沖縄戦と長崎、広島での戦争のどういふような戦争体験を残しているか、継承されているかというところでも、そこを見たからこそ、やっぱり沖縄戦は、こういうところが沖縄だったからこそあったことなんだだったり、長崎の方は、長崎には長崎のものがあって、それを教訓としてずっと残していきたいし、それを広げていきたいというかたちで、本当にいるんなところで連携できたらいいなというのと。

あと、一人のひととの出会い。私は実際に県外の修学旅行生に対して、コロナの前とかであれば、ガイドだったりディスカッションのプログラムを提供するということを実施していたんですけど、そのときに実際に関わって、一緒にその生徒に対して2日間ずっとみっちり、ぎちぎちの沖縄戦から基地問題まで沖縄のいろんな問題に対してフィールドワークに行って、夜に振り返りのディスカッションをしてということをしていたんですけど、そのときに、その学校の生徒さんから終わった後に連絡があって、「私は大学でも沖縄のことを勉強します」ということを言っていたので、その後に、その次の年に来た同じ学校の生徒さんも、「沖縄のことを勉強したいです」というかたちで、最近も徐々に連絡があって、「大学のレポートで平和教育について書きたいんですけど、沖縄ではどんな平和教育がありますか」ということも実際に聞いてきたりというので、ずっと今も連絡を取っているという状態なので。

やっぱり平和学習を「やる側」と「受ける側」というふうになっていると思うんですけども、その「受ける側」の子たちをどういふふう「やる側」に回していくかというところで最大のチャンスであり、最大のスカウト現場だと私は思っているので、そういうところで実際に「一緒にやろうよ」と最後は声を掛けたりというふうにやっております。

### ○司会

次世代の育成ということにもなると思うんですけど、実際に教えるとか伝えるじゃなくていいのかもしれないかも。一緒に考えるとか、「どう思うか」ということでもいいのかもしれない。

狩俣さんに、「この平和事業に関わっている中で、沖縄平和賞の意義について、それから、受賞団体への期待などはありますか」という質問も来ています。

### ○狩俣

ありがとうございます。こちらの事業が沖縄戦のことだったりとか、沖縄から平和を伝えるということなので、やっぱりメインは沖縄戦ということなんですけど、そもそも沖縄平和賞って沖縄県民は全然知らないんですよ。

まったく知らないという問題があると思っていて。私も沖縄県の平和事業に関わるようになってから、沖縄県の取り組みとしてこういったことがあるんだということを知ったので、20代も全然知らないだろうし、もっと上の先輩方もまったく知らないんじゃないかなというところがあります。

なので、期待というか、全然広がっていないというところでは、本当に伸びしろがたくさんあると思うんですけど、沖縄平和賞があるからこそ、沖縄県ってもともと何でこんなに平和に対する思いが強いのかというところで、沖縄戦があるからだよねと。ただ、沖縄戦という過去の戦争から、でも今、沖縄は貧困率だったりとかという、本当にいろんな構造的な暴力がいっぱいある場でもあると思うので、そういったところの現代的な問題に対して沖縄平和賞はアプローチしていると思うので、ある意味そういったところのPRにもつながっていると思います。

なので、そういう沖縄平和賞がどんどん広がっていくことで、こういった活動に対して沖縄県がこういう取り組みをしているだったり、こういう問題って沖縄にもないかなというところで、沖縄の人たちが、先ほど村上会長がおっしゃっていたように、土地のことを知って、土地の問題に対して平和を実践できるということがこれからできればいいなと思っています。

### ○司会

ありがとうございます。まったく知られていないは、ちょっと言い過ぎだと思うので。

もっともっともっとやっぱり伝えていかなければいけないのは事実だと思います。沖縄平和賞についてですが、実は第1回の受賞がこのペシャワール会というふうな名前が挙がったときに、沖縄平和賞の意義とはというのがそこで見えた気がするんですね。沖縄から何を求めているのかといったときに、ペシャワール会の活動を第1回で表彰した、そのことの意味をもう一度私たちも確かめていきたいと思います。

あとは、ちょっと時間の関係があってご紹介できないものもあるんですが、これはご意見というように承りたいと思います。「台湾問題など、きな臭い情勢の中で、日本政府も、平和より危機を声高に国民にアピールし、それにマスコミや大衆も同調しつつあるように思います。同調圧力などや想像力の欠如、懸念されることを多く感じます。今私たちがすべきことは何だと思えますか」という質問です。質問になっていました。失礼いたしました。今私たち一人一人がすべきこと、一言ずつ伺っていききたいと思います。村上さん、どうでしょう。

### ○村上

どうも今日はありがとうございます。アフガニスタン一つ取ってみると、アフガニスタンの人々から日本はすごく尊敬されています。なぜか。あそこでわれわれは一人の人も殺していません。一発の銃も撃っていません。このことで関わり続けているということにアフガニスタンの人たちは、すごい尊敬と親和性を私たちに寄せています。そのことをプライドとして受け止められるかどうかですね。私はそれをプライドとして受け止めていただきたいというふうに思います。

○司会 ありがとうございます。仲本さん、どうでしょう。

### ○仲本

自分は今後もこういった活動を続けながら、沖縄で起きている問題を県外の子たちに話したときに、例えば「基地を返還して、その土地をどうするの」というのを自分に答えを求められる。けど、沖縄というのは、選択肢なしに戦中に基地がつくられて、その後も押しつけられてというのが事実で、それがなくなった後に沖縄の人たちでどう使うか、解決するかというのを求めるのは自分は間違っていると思っています。

という意味で、沖縄で起きている問題をもっともっと、沖縄の問題じゃなくて、日本の問題として取り扱ってくれる、見てくれるような働き掛けもやっぱりしなくてはいけないし、ここで自分が台湾、中国の話をするというのでもできないんですけど、でも沖縄というのは、沖縄戦で見捨てられた。住民が巻き込まれた。自殺、自決までさせられた。しなければいけなかった。

それを「亡くなった命」という軽い言葉で言われていて、自分は集団自決とかも全部国によって殺された命。自分たちで自ら命を絶った。けど、それをしなければいけなかった。させたのは誰なのかというのに向き合って、また沖縄が戦場にならないように自分たちは向き合っていかなければいけない。そのためには沖縄戦の継承はやっぱり重要ですし、体験者が残ってきたものを絶対に語り継がなければいけないというふうに思っています。以上です。

○司会 普天間さん、どうでしょう。

### ○普天間

今の仲本さんの話とも重なるんですけども、あの当時、日本から来た兵士たちは、「自分たちは沖縄を守りに来ているんだ」と言ったんですね。みんな住民にも言ったし、生徒たちにも。でも実際は、沖縄は日本の南の玄関にあって最前線になったんですね。今の状況、沖縄はまた戦争の最前線になり兼ねない今状況になっている中で、守るために戦うんだという同じようなことをすると、同じような悲劇が絶対起こると思うんです。

だから、今私たちは中学生や高校生に講話とかをやるときには、沖縄は南の玄関で最初の戦場になったけど、本当はアメリカ軍は、沖縄を占領した後は日本本土に進撃していく予定だった。でも、その前に戦争が終わったから皆さんのところは地上戦にはならなくて済んだんですよという話をしています。だから沖縄だけじゃなくて、戦争になって戦場になったら本当に日本全体が沖縄戦の体験の二の前になると思うので、どんなことをしてでも戦争にならないような行動をずっと言い続ける。いろんなことを言われても、やっぱりそこは基本じゃないかと思っています。

○司会 ありがとうございます。野添先生、お願いいたします。

### ○野添

ほかの方々のお話とたぶん重なるところもあると思うんですが、やはり歴史を振り返らなければいけないと思いますね。台湾有事とか米中対立とか、そういうことの中で非常に勇ましい声がある一方で、そういうことが実際に起こったら何が起るのかというのは、まさに沖縄戦の事実というのは示しているように思います。

また、それとともに、やはり他者への共感というのも非常に大事だと思います。亡くなる人、あるいは傷つく人々がどういう痛みを持っているのかということについて、それに思いを致すということが平和をつくるまず第一歩なのではないかと思えます。

世の中はまだ、ガルトゥングという人が「積極的平和」「消極的平和」ということを言いましたが、やっぱり本当の平和というのは、差別とか、あるいは貧困とか、そういうものがなくなることだと。また、そういうことがある状態が戦争にもつながるとかを言ったことがありますが、まさに身近な人々、身近なところからそういう人の痛みに対して敏感になることもまず大事なのかなと思っています。

○司会 ありがとうございます。狩侯さん。

○狩侯

まず、この質問の書き方がすごくすきだなと思って、「私たち」がすべきことというところで、この今会場にいる方々でも、オンラインで見ている方々でも、たぶんこれから皆さんがおうちに帰って、ご家族がいっしょの方だったり、その後にお友達とご飯を食べに行ったりするのかなと思うんですけど、そういった方たちみんなが何をすればいいんだろうというところで、先ほどからずっとやっているように、平和は実践というところが、もうすでに皆さん実践されているなというところが、とてもすきだなと思って、すごくすきな質問をありがとうございます。

すごく難しい質問なんですけど、私たち一人一人が何ができるか。逆に言うとなんか一人一人が何かをしようと思っても、戦争だったりとかの構造的な問題って、一人一人がどうにかしようと思っても、やっぱり一人一人の行動というのが、大きな行動だったり、大きな社会のムーブメントにならないと難しいなと思うところもちろんならんですけど、じゃあ、そのムーブメントをつくるためだったり、普段からそういったことに意識が向いたり考えるためにどうしたらいいんだろうと思ったときには、やっぱりそういったこと、戦争のことだったり、沖縄のことだったり、あるいはアフガニスタンのことだったりというのが日常会話レベルでできるようになればいいなと思っています。

私は平和学習というものをやっているんで、お仕事柄、どう言ったらこういう難しい話とか、みんながちょっとタブーに感じているような話をみんなが話せるようになるかなというのをずっとぐるぐる考えていたんですけど、それって教育現場でやる時のアプローチであって、日常的にそういった話ができるようになるにはどうしたらいいんだろうと思ったときに、「これは私の意見。これは私が話したい話なんだ」だったり、「こういう話がすき好きで」とかというかたちでどんどん、ちょっと言い方が悪いんですけど、こういった話だったり、人と意見を交換するのがすごく楽しいものというふうに感じてもらえればいいなと思っています。

例えば私はすきアイドルとかが好きなんですけど、アイドルの話をした直後に、「そういえば選挙がさ」というような感じで、本当に日常的に友達にそういった話をして、「こういうことを思ったんだよね」というようなかたちで、自分はこう思ったんだというのを言うだけでも、その友達は「あ、そういうことを思っているんだ」と。それに対して何かべつに、そこからまたその子に、どう思っているのか、何でも考えてないのというのを責めたいわけではなくて、ただただ聞いてほしいというかたちで、どんどんこの話をしている人にしていて。

そうやってくとみんな、「そういえば日姫が沖縄戦の話をしてたな。これ、ニュースで沖縄戦のことをやっている」と思ったら、私にLINEのメッセージで、今日のニュースでこういう沖縄戦のことをやっていたよということをどんどん話してくれたりというので、誰かのきっかけになるために自分が話したいことを話す。

それはたぶん戦争以外の問題もあって、ジェンダーの問題だったり、ハラスメントの問題だったり、自分自身がマイノリティーでそれを隠しているという状態だったりすると思うんですけど、そういった人々に対して、この人には何を話してもいいという心理的な安全をつくる。そういった関係性をつくることで、もしかしら、その人の「平和」に対して自分が話を聞いてあげる、この人に話したら話していいと思える関係性があるというだけで、たぶん一つそれは実践になるのかなと思うので、そういったことで皆さんと一緒に、どんどん話題だったり日常化していけばいいなと思います。

○司会

ありがとうございます。絶対的な正義の下に戦争が行われているというような気がしています。多様な価値観、多角的にものを認めて、お互いがどこまで譲れるのか。先ほど村上さんの話の中にもあったんですけども、人が人として生きていく権利、「生存権」と確か村上さんはおっしゃっていたと思うんですけども、最後に今日のシンポジウム、まだまだお話を伺いところですが、メッセージをいただきたいと思えます。戦争に向かない社会をつくるためには。

○村上

何度も出ていますけど、やっぱり「非戦」しかありません。

戦わない。

戦いをしてもものを解決するという選択肢を捨てなければ。人間ですから必ずいろいろなまた争いがあるわけですから、「争いを戦いで」という選択肢をなくすことだと思います。

○司会

ありがとうございます。沖縄からメッセージを届けていますが、アフガニスタンの状況、それから世界的にもいろいろなところでもまだまだ火種もありますし、戦争、紛争が絶えません。その中で私たちがどういう選択をしていくのか。文化、文明とは実際にどういうものなのか。

メッセージがありました。相互扶助だとか平和を考えるキーワードが今日たくさん出てきています。皆さんの質問の中にも今日取り上げられなかったものがいくつもあるんですが、「SDGs」、持続可能な開発目標を掲げて達成することが平和につながると思われませんか」ということが質問として出てきていることも添えておきたいと思えます。

貧困、そして地球の環境の問題などもつながっていると思えます。これをきっかけにまた共に考えていくことができると、きっと未来につながるのではないのでしょうか。

来年は、沖縄は5月15日、復帰から50周年を迎えます。一つの節目になりますね。

戦後という77年。平和な社会を築いていくためには、今をどのように捉え、私たちがどのような選択をしていくことができるのか、これからも一緒に考えていただきたいと思えます。

今日は長時間ありがとうございます。パネリストの皆さんに拍手を送りたいと思えます。ありがとうございます。「びーすふるシンポジウム」はこれで結ばせていただきたいと思えます。ありがとうございました。

お帰りの際ですけれども、皆さんこちらに入られるときには、実際に6階までしかエレベーターは動きませんでした。お帰りの際は7階から降りることができるようになっておりますので、どうぞご利用ください。誠にありがとうございました。

(終了)





## 沖縄県沖縄市

- 実施期間** 令和4年2月18日(金)～24日(木) 7日間
- 会場** イオンモール沖縄ライカム(2Fイベントスペース)
- 概要** 昨年に続き、イオンモール沖縄ライカムのイベントスペースを借用して実施した。  
人通りの多い場所であり、また老若男女の集まる商業施設でもあり、多数の方が足を止めて見学されていた。

**アンケート回答** 2件



## 沖縄県那覇市

- 実施期間** 令和4年3月1日(火)～7日(月) 7日間
- 会場** サンエーメインプレイス那覇(3F展示スペース)
- 概要** 那覇市内で最大のショッピングモールであるサンエーメインプレイス那覇(3F展示スペース)を借用して実施したエスカレーター・エレベータの手前で人の出入りが多い場所で、足と止めてくださる人も多くご見学頂いた。

**アンケート回答** 2件





## 巻末付録

36 御万人ピースふるアクション 制作物

41 ピースふるシンポジウム アンケート結果

42 ピースふるワークショップ アンケート結果



U M A N C H U P E A C E F U L A C T I O N

SNS広告: びーすふるシンポジウム (LINE)



SNS広告: びーすふるワークショップ



認定証



SNS広告: びーすふるメッセンジャー



沖縄県平和啓発 新聞広告 (全3段)

UMANCHU PEACEFUL ACTION 2021

## びーすふるワークショップ

受講希望校 募集

沖縄戦の記憶を学びたいという学校からのご応募をお待ちしています。

◎対象: 小・中・高・大学 ◎沖縄県内5校 / 沖縄県外: 3校  
◎受講費用: 無料 (講師の出張費も無料です)

## びーすふるメッセンジャー

活動希望者 募集

沖縄戦の家祖や歴史的教育を次世代へ伝える活動。この活動を行っていた方々を募集いたします。

▶びーすふるワークショップとは?  
戦後76年を節目、戦争犠牲者への追悼活動として行われてきました。その方々から学ぶ機会として、沖縄県内5校から、平和の大切さを伝えるためワークショップを実施し、県内外へ発信していきます。WEBツール(Zoom)を使用したオンライン講座も開催可能です。

▶びーすふるメッセンジャーとは?  
沖縄戦の平和の歩みを知るメッセンジャーとして、平和への意識を高める活動をしていただきます。詳細は必ずしもフォローしてください。

●申込先  
認定証発行: ウービーすふるアクション事務局  
沖縄県平和啓発プロジェクト事務局 (本部) 事務局  
〒900-8622 沖縄県那覇市上原1-1-1  
Tel: 098-862-3548  
Fax: 098-862-3548  
info@umanchu-peaceful.com

●募集対象  
中学生以上 (高校生以上が望ましい) / 県内外在住  
申込締切: 2021年10月20日

詳しくはホームページをご覧ください。  
umanchu-peaceful.com

沖縄県 SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

びーすふるシンポジウム 新聞広告 (全5段)

UMANCHU PEACEFUL ACTION 2021

# 御万人びーすふるアクション (沖縄平和啓発プロジェクト事業)

## びーすふるシンポジウム

かつて平和を愛する母国としてアジア諸国と交際してきた沖縄。往高を誇る20万人の犠牲者を出した地上戦の場となった沖縄。このような歴史から、沖縄を再びわたすに求め続けている平和への思い「沖縄のこころ」を、戦後76年を記念し2021年に改めて伝えたい。そして令和の時代における平和の意義、わたしたちができることは、

主催: 沖縄県平和啓発プロジェクト事務局 (本部) 事務局  
〒900-8622 沖縄県那覇市上原1-1-1  
Tel: 098-862-3548  
Fax: 098-862-3548  
info@umanchu-peaceful.com

開催日時: 2021年11月20日(土)  
開場 13時30分 開演 14時 (総演16時40分予定)

会場: 東京国際フォーラム (197ホール)  
〒100-0025 東京都千代田区丸の内3丁目1-1

定員: 会場総演 50名 / オンライン総演 500名

参加無料 (先着順申し込み)

### プログラム

**第1部 講演会**

特別講演: **中村哲医師の事業を継いで〜アフガニスタンの今〜**  
東京国際平和研究所 ベンチャール会 会長 村上優氏

期待講演: **ひめゆり、次世代へ〜リニョールと新しい語り継ぎ〜**  
ひめゆり平和記念資料館 館長 菅天間朝佳氏

パネリスト: ベンチャール会 会長 村上優氏  
ひめゆり平和記念資料館 館長 菅天間朝佳氏  
沖縄国際大学 法学部地域行政学専攻 准教授 野添文彬氏  
「びーすふるメッセンジャー」 仲本和正

### 出演者

司会: コーディネーター 佐藤山美智子氏 (フリーアナウンサー)

特別講演: ベンチャール会 会長 村上優氏  
期待講演: ひめゆり平和記念資料館 館長 菅天間朝佳氏

パネリスト: ベンチャール会 会長 村上優氏  
ひめゆり平和記念資料館 館長 菅天間朝佳氏  
沖縄国際大学 法学部地域行政学専攻 准教授 野添文彬氏  
「びーすふるメッセンジャー」 仲本和正

### 応募方法

会場総演希望者	オンライン総演希望者
アットパスまたはメールにて、住所・氏名・年齢・職業・入会理由・応募希望のセッション・応募希望のセッションの希望理由・その他を必ずお送りください。	特設ホームページの応募フォームから、必要事項を入力し、応募してください。
アットパスまたはメールにて、住所・氏名・年齢・職業・入会理由・応募希望のセッション・応募希望のセッションの希望理由・その他を必ずお送りください。	特設ホームページの応募フォームから、必要事項を入力し、応募してください。

申込締切: 2021年10月20日(水)~11月12日(金)

アクセス: 098-862-3548 Eメール: info@umanchu-peaceful.com

〒900-8622 沖縄県那覇市上原1-1-1 (本部) 事務局  
Tel: 098-862-3548

特設ホームページ: umanchu-peaceful.com





登録ホームページ  
umanchu-peaceful.com

株式会社マン・ローゼンロー  
沖縄平和教育プロモーション事業部(平島 謙太郎)

〒900-0021 沖縄県那覇市上原1-1-1  
Tel: 098-922-2177 Fax: 098-922-2188  
E-mail: info@umanchu-peaceful.com

沖縄県 GOALS



東京ぴーすふるアクション(沖縄平和教育プロモーション事業)

## ぴーすふるシンポジウム

11月20日(土)

東京国際フォーラム

### ぴーすふるシンポジウム

かつて平和を要する状況下としてアフガニスタンと交戦を繰り返した沖縄。住民を巻き込み20万人余の犠牲者を出した地上戦の場となった沖縄。このように歴史から、沖縄県民が心もつらに求められている平和への思い「沖縄のこころ」を、戦後70年を迎える2021年に改めて伝えたい。そして令和の時代における平和の意味、伝えたいとできることとは。

#### プログラム

14:00 開演

14:01 主催者挨拶

**第1部 講演会**

14:06 特別講演  
**中村哲医師の事業を継いで ～アフガニスタンの今～**  
ベシワール会 会長 村上 優氏

15:06 招待講演  
**ひめゆり、次世代へ ～リニューアルと新しい取り組み～**  
ひめゆり平和記念資料館 館長 普天間 朝佳氏

15:36 休憩

**第2部 パネルディスカッション**

15:45 ●ディスカッションテーマ1  
**それぞれの立場から見る、平和のカチ**

●ディスカッションテーマ2  
**戦後100年を認えるために、いま出来ること**

16:30 質疑応答

16:45 終演

#### 出演者

司会・コーディネーター 佐藤山崎智子氏(フリーアナウンサー)

特別講演者

村上 優氏  
第1回沖縄平和賞受賞  
ベシワール会 会長

大分県立大、九州大学医学部、ベシワール会会長の村上優氏は、アフガニスタンに渡り、民間の平和教育活動「ベシワール」を推進する中で、2017年10月にアフガニスタンで発生したテロ攻撃に巻き込まれ、重傷を負った。その経験から、ベシワール会を設立し、平和教育の普及に取り組んでいる。また、アフガニスタンの平和教育活動「ベシワール」を推進する中で、2017年10月にアフガニスタンで発生したテロ攻撃に巻き込まれ、重傷を負った。その経験から、ベシワール会を設立し、平和教育の普及に取り組んでいる。

特別講演者

普天間 朝佳氏  
ひめゆり平和記念資料館 館長

1947年12月15日、沖縄県浦添市、浦添女子学校に生まれる。2000年、ひめゆり平和記念資料館(現ひめゆり館)の館長に就任。2010年、ひめゆり平和記念資料館(現ひめゆり館)の館長に就任。2010年、ひめゆり平和記念資料館(現ひめゆり館)の館長に就任。2010年、ひめゆり平和記念資料館(現ひめゆり館)の館長に就任。

ディスカッション者

野添 文彬氏

沖縄国際大学  
法学部地域文化学科 准教授

2006年卒業後、一橋大学大学院法学研究科修士課程修了。博士(法学)。一橋大学法学部地域文化学科准教授。2010年11月、沖縄国際大学法学部地域文化学科准教授に就任。専門は国際法、平和法、憲法。近年は沖縄平和教育活動の国際展開について研究している。

ディスカッション者

野添 文彬氏

沖縄国際大学  
法学部地域文化学科 准教授

2006年卒業後、一橋大学大学院法学研究科修士課程修了。博士(法学)。一橋大学法学部地域文化学科准教授。2010年11月、沖縄国際大学法学部地域文化学科准教授に就任。専門は国際法、平和法、憲法。近年は沖縄平和教育活動の国際展開について研究している。

司会者

野添 文彬氏

仲本 和氏

狩俣 日姫氏